

貝塚市埋蔵文化財調査報告第14集

貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅸ

1987. 03. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は北を海に面し、南は山波に接した風光明媚な自然環境に恵まれた立地条件を有し、歴史的にも古い伝統をもち、泉州地域の中におきましても重要な発展を遂げてきた所で、市内各所には貴重な文化財が数多く散在しております。地下に埋もれる埋蔵文化財におきましても市内には数多くの包蔵地を有しております。

しかしながら、近年の都市化の波による各種開発はこれらの文化財を破壊の危機にさらしているのも事実であります。

本書は貝塚市が昭和61年度事業として実施してまいりました緊急調査による埋蔵文化財の発掘調査結果の一部をここに報告するものであります。

調査はその性格上開発行為に伴うものであり、期間的・面積的な制約が加わる中での調査が多く十分な成果が得られていないのも事実であります。地域の歴史を知るうえで多少なりともみなさま方のお役に立つ一助となれば幸いかと存じます。

なお、調査にあたり地元の方々をはじめ関係者各位には多大のご協力とご理解を頂き末筆ではあります。ここに深く感謝の意を表します。

昭和62年3月

貝塚市教育委員会

教育長 岡 根 和 雄

例 言

1. 本書は貝塚市教育委員会が昭和61年度に国庫補助金を受けて実施した、貝塚市域における緊急発掘調査結果のうち、堀遺跡並びに沢遺跡の発掘調査にかかる結果の概要報告である。

2. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育室社会教育課西岡巖・嘱託池田毅が担当し、昭和61年4月1日より調査を実施し、翌62年3月31日に終了した。

現地調査および本書作成にあたる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

小林 修 西野貴也 大橋良子 平井令子 丸谷知子
南 珠美 山本和枝

3. 本書の執筆は池田が行い、校正・編集は西岡が行った。出土遺物観察表の作成並びに各図面・図版の作成は池田が行い、補佐的作業を上記諸氏の協力を得て実施したものである。

目 次

はじめに

例 言

目 次 (本文目次、図版目次、挿図目次)

I. 堀 遺 跡 の 調 査	1
1. 位 置 と 環 境	1
2. 遺 構 と 遺 物	1
II. 沢 遺 跡 の 調 査	16
1. 位 置 と 環 境	16
2. 遺 構 と 遺 物	19
出土遺物観察表	25

図版目次

図版1 堀遺跡

1. A区調査区全景
2. 同上

図版2 堀遺跡

1. A区調査区、竪穴式住居跡1 (SB-1)
2. A区調査区、竪穴式住居跡2 (SB-2)

図版3 堀遺跡

1. B区調査区、竪穴式住居跡101・102 (SB-101・102)
2. B区調査区、土 壙101 (SK-101)

図版4 堀遺跡

1. A区調査区、溝1 (SD-1)遺物出土状況
2. 同上

図版5 沢遺跡

1. 調査区全景
2. 溝2 (SD-2)付近全景

図版6 沢遺跡

1. 掘立柱建物1・2 (SB-1・2)
2. 同上

図版7 沢遺跡

1. 溝1 (SD-1)
2. 同上、土層断面

挿図目次

図1. 貝塚市遺跡分布図

図2. 堀遺跡調査位置図

図3. 遺構平面図

図4. 竪穴式住居跡101 (SB-101)出土遺物

図5. 竪穴式住居跡102 (SB-102)出土遺物

図6. 竪穴式住居跡2 (SB-2)出土遺物

図7. 竪穴式住居跡1 (SB-1)落ち込み状

遺構5・6 (SX-5・6)、土壙2 (SK-2)出土遺物

図8. 溝1 (SD-1)出土遺物

図9. 溝1 (SD-1)出土遺物

図10. 溝1 (SD-1)出土遺物

図11. 土壙101 (SK-101)出土遺物

図12. 竪穴式住居跡102 (SB-102)出土遺物

図13. 沢遺跡調査位置図

図14. 遺構平面図

図15. 溝1 (SD-1)出土遺物

図16. 掘立柱建物1 (SB-1)、溝2 (SD-2)出土遺物

図17. 溝1・2 (SD-1・2)出土遺物

表1. 貝塚市遺跡地名表

I 堀遺跡の調査

1 位置と環境

発掘調査を実施したのは、貝塚市の北部に位置する堀遺跡地内の一角である。調査地は貝塚市と岸和田市との境を流れる津田川左岸の河岸段丘上の最上位の縁辺に位置し、海拔は約10m程度を測る。現在の海岸線からは約1km内陸部にはいった地点である。

周辺には現在のところ、水田あるいは畑といった耕作地が若干広がっているものの宅地や小工場等の建物がかなり密集している地域である。

周辺地域を含めた当地域の歴史的環境については、現在までのところあまり明確にはとらえられていないのが実情であり、当堀遺跡の性格についてもかつて奈良～室町時代の遺物が散布しているといった遺物散布地としての取り扱いだけであった。今回の調査結果から、奈良時代以前の住居跡等が検出され、少なくとも古墳時代中期頃までには人々の生活が始まっていたようである。

津田川の左右両岸には、地理的に見て当遺跡以外にも各時代の集落跡等が存在していても不思議ではない地域のように思われ、今後の調査に期待される地域である。

今回報告するのは、昭和60年度末および本年度に調査した同敷地内の2ヶ所の調査結果について報告するものである。

2 遺構と遺物

調査の方法は、宅地造成の計画をも勘案しながらではあるが、調査地に結果的なはコの字形で幅約4m、総延長約66mのトレンチ状の調査区を設定し、発掘調査を実施した。

基本土層としては20～50cmの現表土（攪乱盛土）下で遺物包含土層となる。以下、遺物包含土層の堆積が30～80cm程見られ黄色地山面に達する。各種遺構はその地山面に切り込む形で検出された。

検出遺構の種類としては、A区西端および中央部とB区で方形のプランをもつ竪穴式住居跡を合わせて4基（SB-1, 2, 101, 102）検出するとともに、多量の須恵器飯蛸壺形土器を検出した溝状遺構（SD-1）や掘立柱建物跡2棟およびその他性格不明の柱穴や土壌状の落ち込み遺構を多数検出した。以下、検出遺構の種類別に報告することにする。

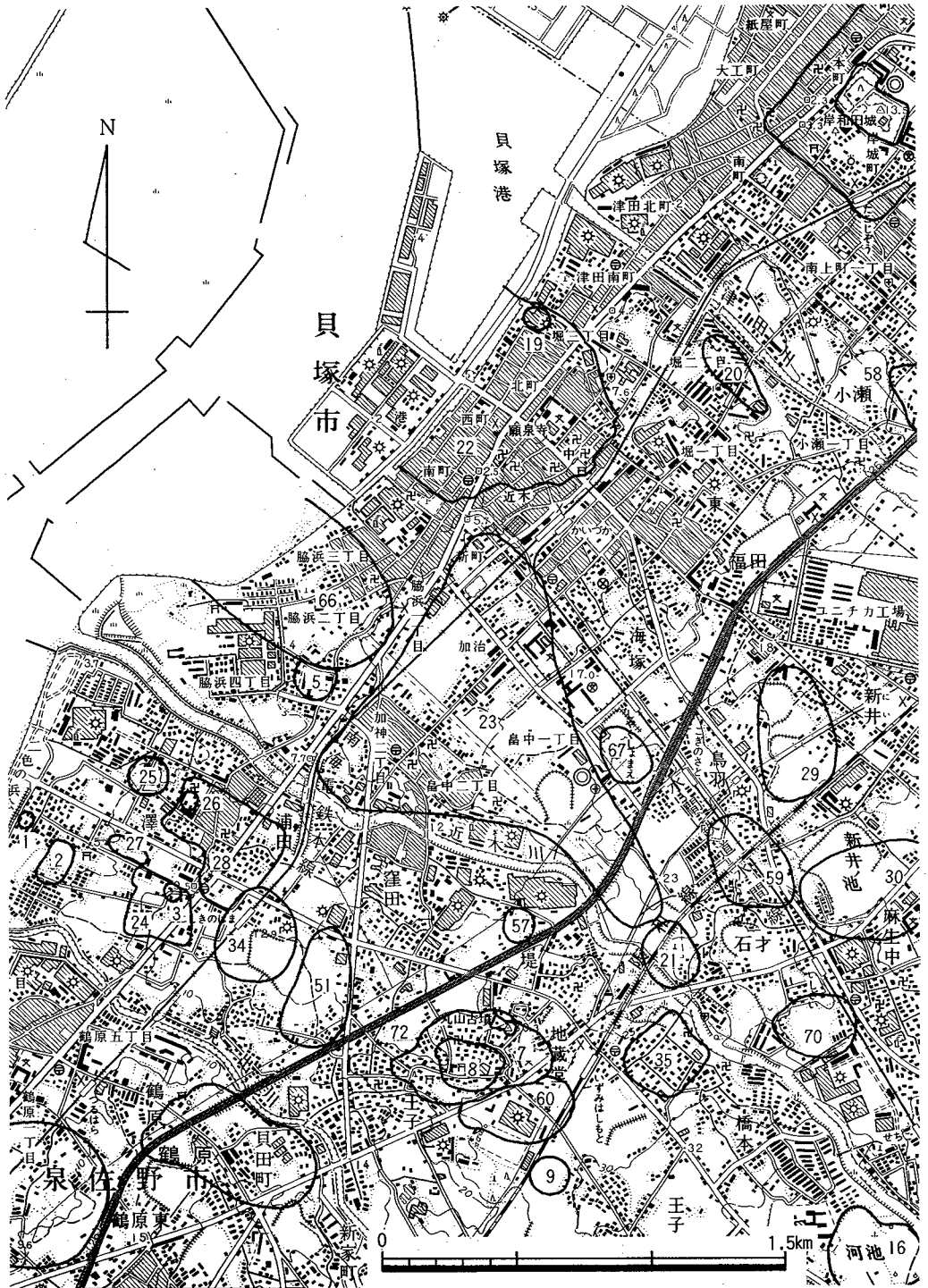


図1. 貝塚市遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|---------------|------------|-------------|
| 1. 沢新出遺跡 | 19. 泉州麻生塩壺出土地 | 27. 沢海岸北遺跡 | 58. 小瀬五所山遺跡 |
| 2. 沢海岸遺跡 | 20. 堀遺跡 | 28. 沢城跡 | 59. 石才遺跡 |
| 3. 沢遺跡 | 21. 橋本遺跡 | 29. 新井鳥羽遺跡 | 60. 王子遺跡 |
| 5. 長楽寺跡 | 22. 貝塚寺内町遺跡 | 30. 新井ノ池遺跡 | 66. 脇浜遺跡 |
| 7. 丸山古墳 | 23. 加治神前島中遺跡 | 34. 澱池遺跡 | 67. 今池遺跡 |
| 8. 地藏堂廢寺跡 | 24. 明楽寺跡 | 35. 積善寺城跡 | 70. 石才南遺跡 |
| 9. 下新出遺跡 | 25. 沢共同墓地遺跡 | 51. 窪田遺跡 | 72. 地藏堂遺跡 |
| 16. 河池遺跡 | 26. 沢西出遺跡 | 57. 堤遺跡 | |

表1. 貝塚市遺跡地名表

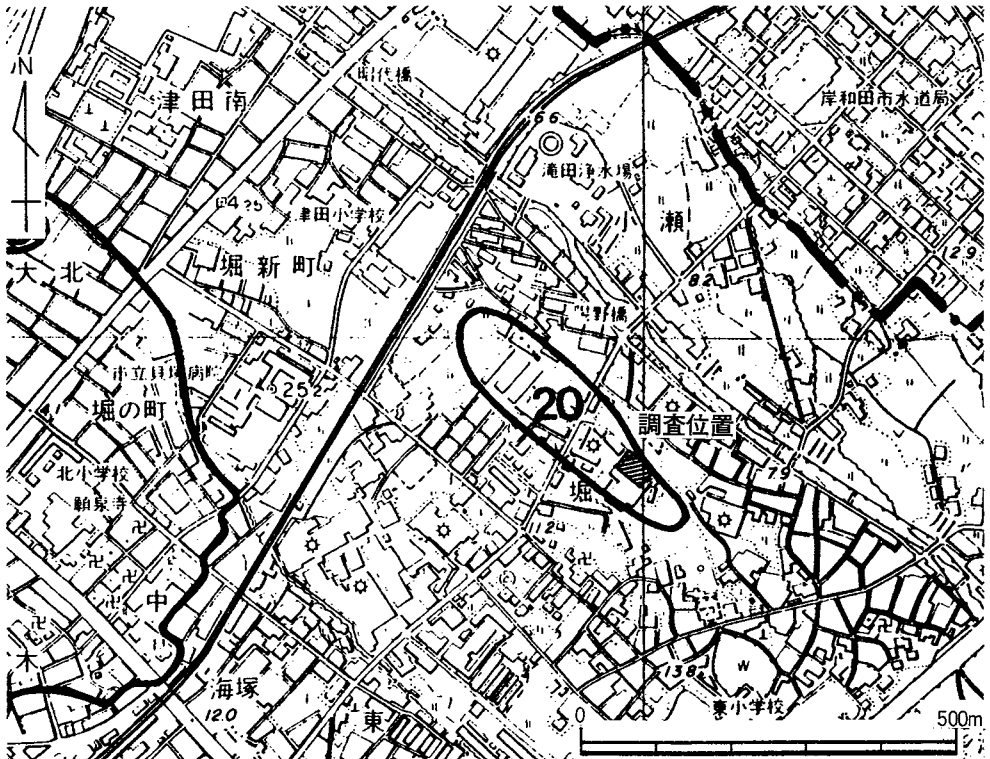


図2. 堀遺跡調査位置図

竪穴式住居跡

4基検出している。SB-1はA区西端の壁面に沿って検出したものであるが、全体の約2分の1程度を調査したのみである。規模としては一辺約3mを測り、遺構検出面よりの住居跡の深さは約15cm程であった。出土遺物としては土師器の高坏（遺物番号21, 22, 25）坏(23)、小型壺(24)のほか壺形土器かと思われる土師器の小破片が床面より多数検出されている。

SB-2は、A区のほぼ中央部で検出したものである。規模としてはやや長方形を呈し

一辺約4mと5mである。遺構検出面よりの深さは最大約40cm程度を測り得た。ただ、壁溝および柱穴は検出し得なかったものの住居跡内の南側で貯蔵穴かと思われる不定形な土壌を1ヶ所検出した。土壌内からは土師器の高坏(14)と壺(20)の口縁部が出土したほか、住居跡内の床面および床面よりやや浮き上がった状態で、土師器の高坏(13, 16)、甕(15,) および小型壺(18)、壺(19)等が検出されている。

B区では、切り合い関係を有して、SB-101, 102の2基の竪穴式住居跡を検出した。切り合い関係よりSB-101の方が新しいものであるが、SB-102の床面の深さがSB-101より深く、また住居跡の東側部分が全体に攪乱削平されているため、SB-101のコーナーが削り取られてしまっていたこともあり、完掘後の記録図面上からはSB-101が不明確なものとなってしまっている。

SB-101の規模としては、一辺約4mのほぼ正方形となるものである。遺構検出面よりの深さは約10cm程度である。出土遺物としては、出土量が少なくかつ小破片であったため器形の分かるものとしては、土師器の高坏(1, 2, 3)片3点および南東隅の壁面に沿って砥石(4)を1点検出したのみである。

SB-102は、一辺3.5~4mのやや不整形な方形を呈する住居跡である。住居跡の東側が攪乱削平がきついため、遺構検出面よりの深さは東側部分で約20cm程である。ただ、最大の深さは約40cm程度を部分的に測り得た。住居跡内中央部には、床面よりの深さ約30cm、径約40cmの掘り方を呈する2本の主柱穴が南北方向に並び、さらに住居跡の各コーナーには添え柱とでもいうべき深さ10~20cm、径約30cmを測る柱穴を4ヶ所検出し得た。また、東側壁面には、一辺約1mのやや不定形な方形を呈する土壌状遺構をも合わせて検出している。この中からは土師器の小型壺が1点出土し、その他床面あるいはやや床面より浮き上がった状態で高坏(5, 6, 7)、甕(11)、小型壺(8, 9, 10) および大型の壺(12)等が出土した。

これら竪穴式住居跡4基の時期としては、SB-101がSB-102より新しいことは分かるが、SB-1 およびSB-2との時期的差異についてはあまりないものと思われ、SB-102とほぼ同様の時期のものと考えられる。年代としては、5世紀前半代それも須恵器出現期前後のものと思われる。なお、今回の調査で、SB-102内の埋土よりサヌカイト製の石鏃(59, 60) および石錐(61)が少量の剥片とともに出土しており、またSB-102の北側でSB-102に伴う貯蔵穴かと思われる長径約1.4m、短径約0.9m、深さ約0.6mで断面形が緩やかなV字形を呈する土壌(SK-101)を1基検出しているが、その埋土内からもサヌカ

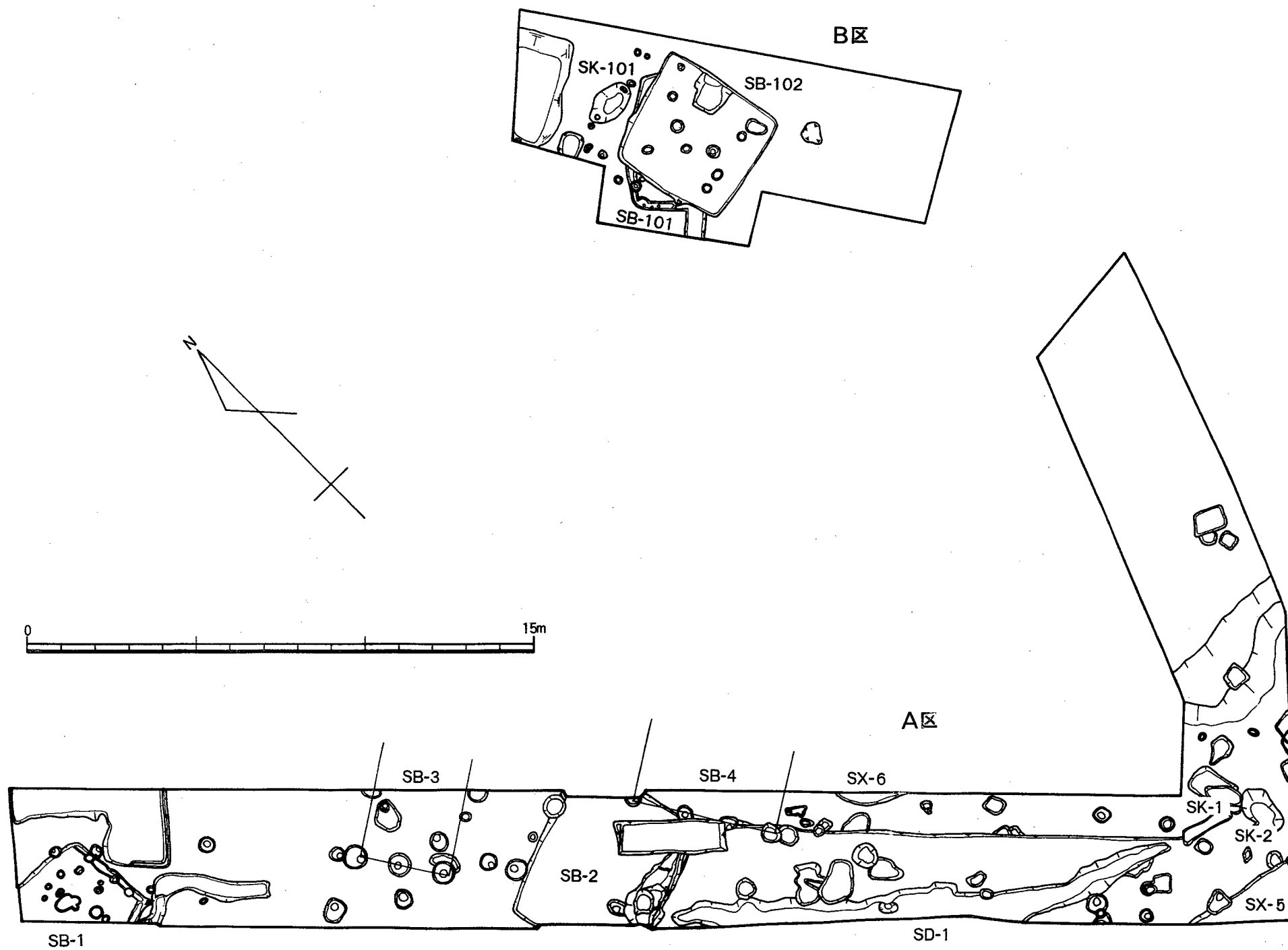


图 3 . 遺構平面図

イトの剥片や石斧 (58) 片が出土しており、弥生時代の包含土層を埋土としているようである。これは近くに弥生時代の集落跡も存在する可能性を示すものと思われる。また、SB-101内出土の高坏脚部(2,3)についても土器形態においてこの住居跡に伴う遺物と考えられるにはいささか問題があるように思われる。

溝状遺構

前述の竪穴式住居跡とはまったく時代を異にするものであるが、A区SB-2の東側で検出した溝1 (SD-1) が上げられる。

SD-1はSB-2のすぐ東側より検出され、南東方向からしだいに東方に向きを変えている溝である。検出し得た全長は約15mを測り、溝幅については溝自体が調査区の壁面に沿って走っており、一方の肩部分のみの検出で正確な幅は不明であるが、おおむね最大の幅は約2m程度のものであると思われる。遺構検出面よりの深さは15~30cm程度を測り得た。

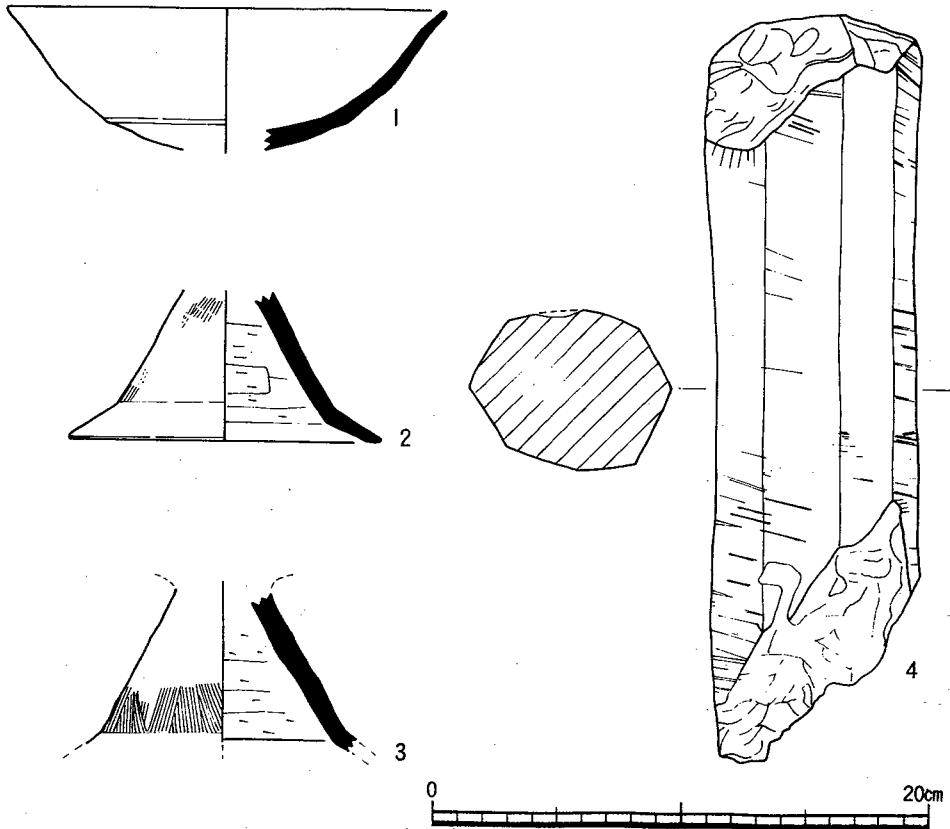


図4. 竪穴式住居跡101(SB-101)出土遺物

出土遺物としては、須恵器の坏蓋 (31, 32, 33)、坏身 (34, 35, 36) のほか高坏 (38, 39) および壺 (37) や土師器坏 (40, 41) 等が出土しているが、その他に100点以上の須恵器飯蛸壺形土器 (42~57) が出土している。

遺物の検出状況としては、溝内の底場付近よりの出土はほとんどなく若干浮き上がった

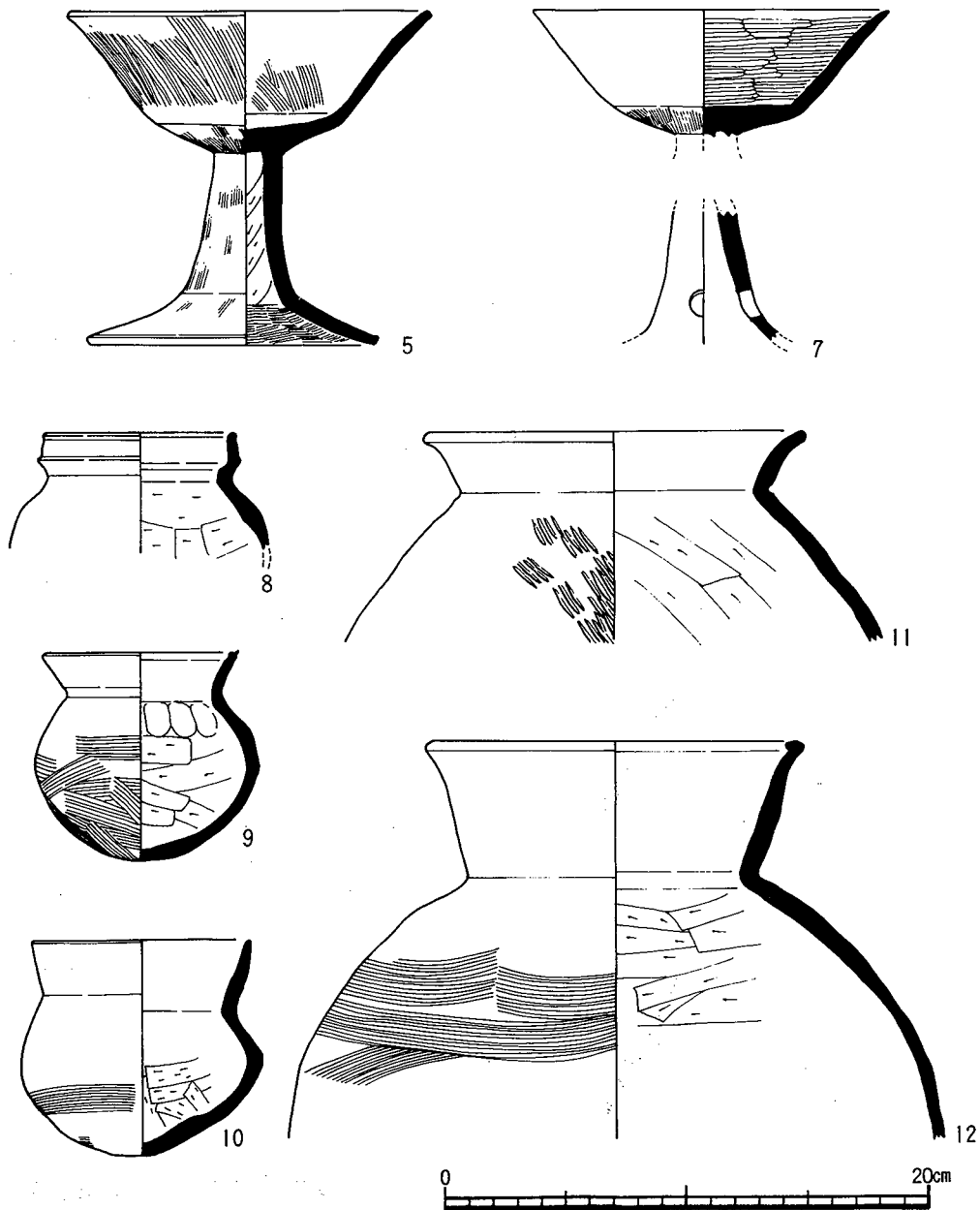


図 5 . 竪穴式住居跡102 (SB-102) 出土遺物

状態での出土である。飯蛸壺形土器の出土状況も全て溝内上部よりの出土であるが、約5ヶ所のブロックに大きく分かれて出土し、1ブロックが20~30個であった。それも折り重なるように山積された状況での出土であった。SD-1の時期としては、出土遺物より7世紀初頭頃のものと考えられる。

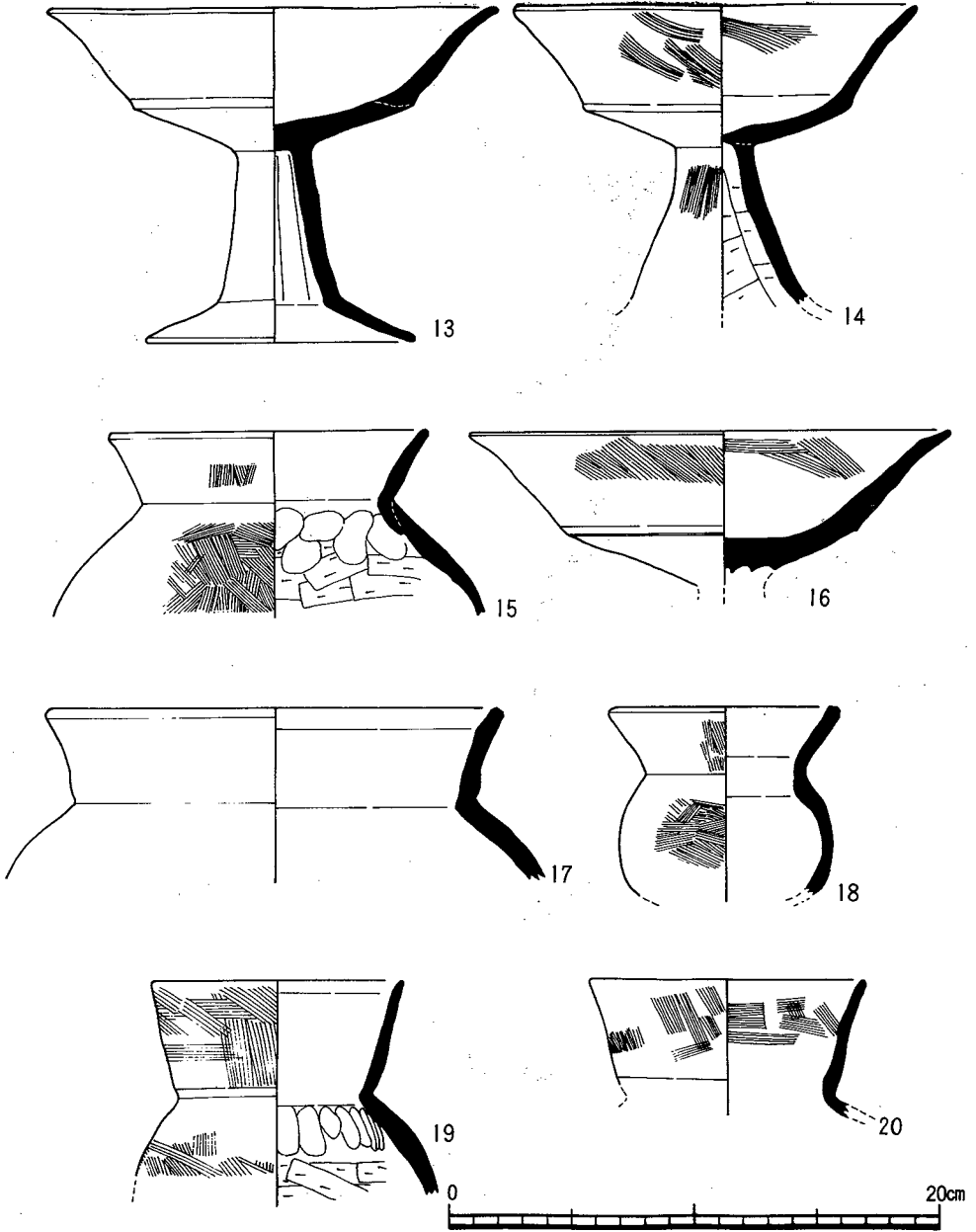


図6. 竪穴式住居跡2 (SB-2) 出土遺物

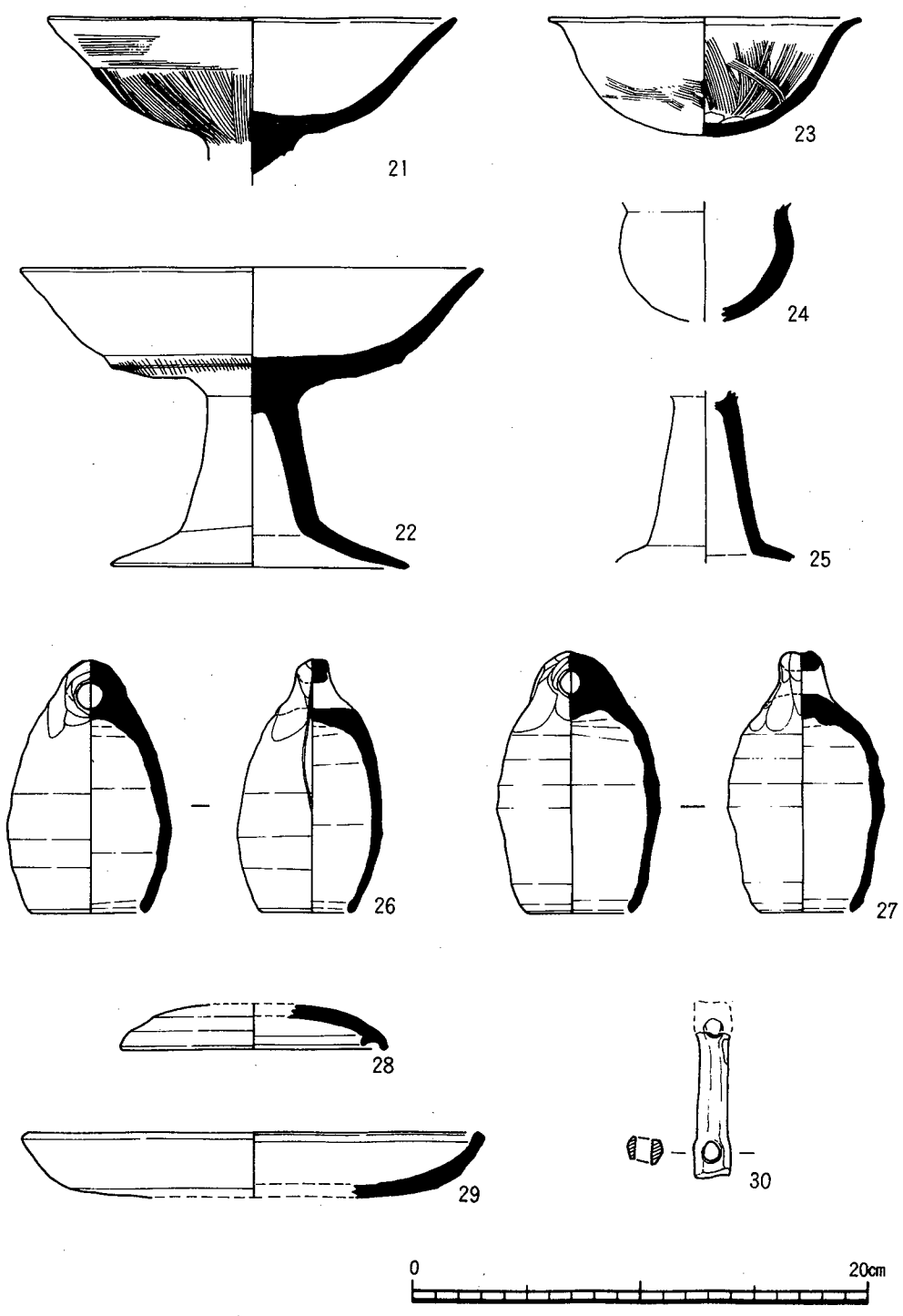


図7. 竪穴式住居跡1(SB-1), 落ち込み状遺構5・6(SX-5・6), 土壌2(SK-2)出土遺物

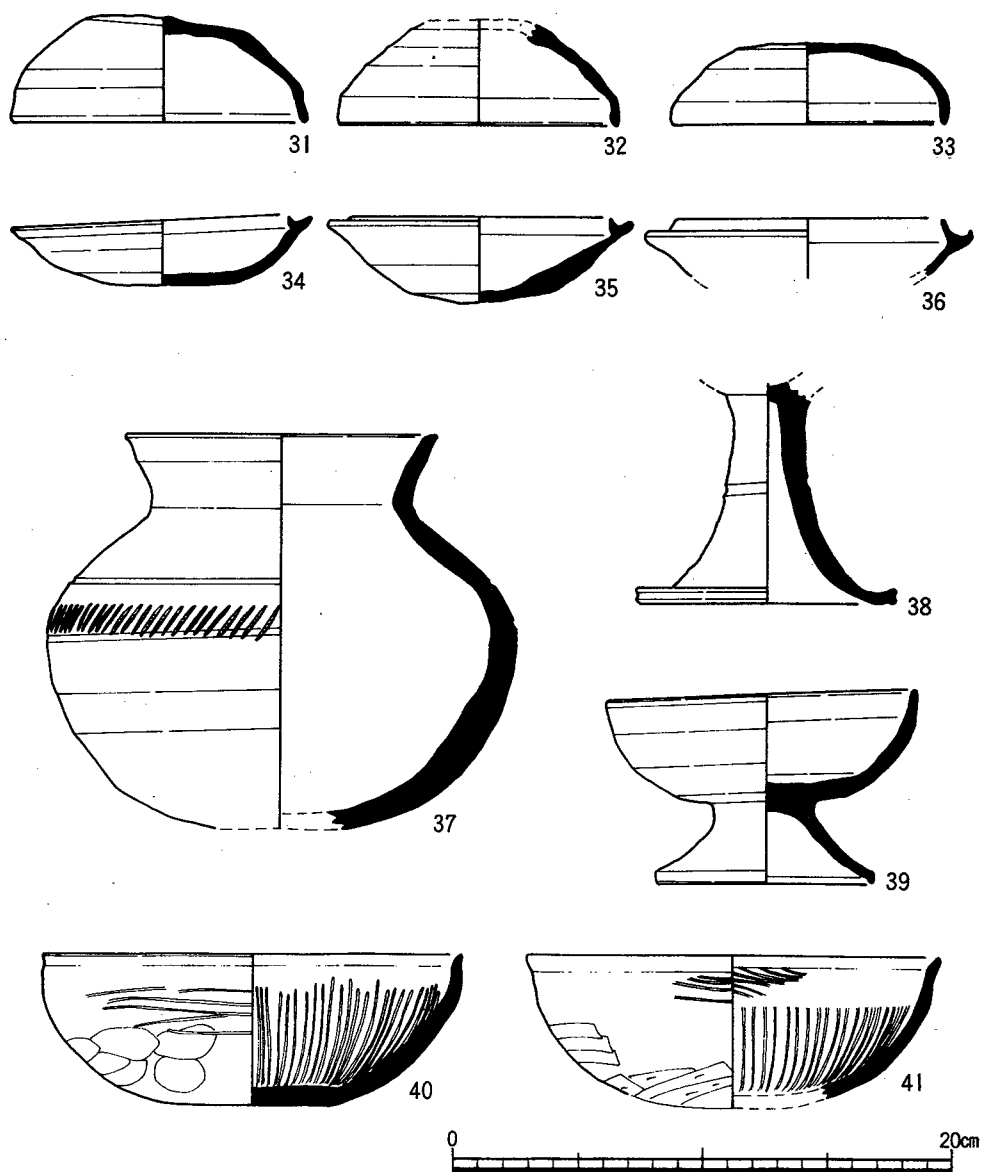


図8. 溝1 (SD-1) 出土遺物

その他、SD-1と同時期かと思われる出土遺物をもつ遺構として土壇2 (SK-2) および性格不明の落ち込み状遺構5, 6 (SX-5, 6) 等があるもののSD-1との関連性については不明瞭なものである。

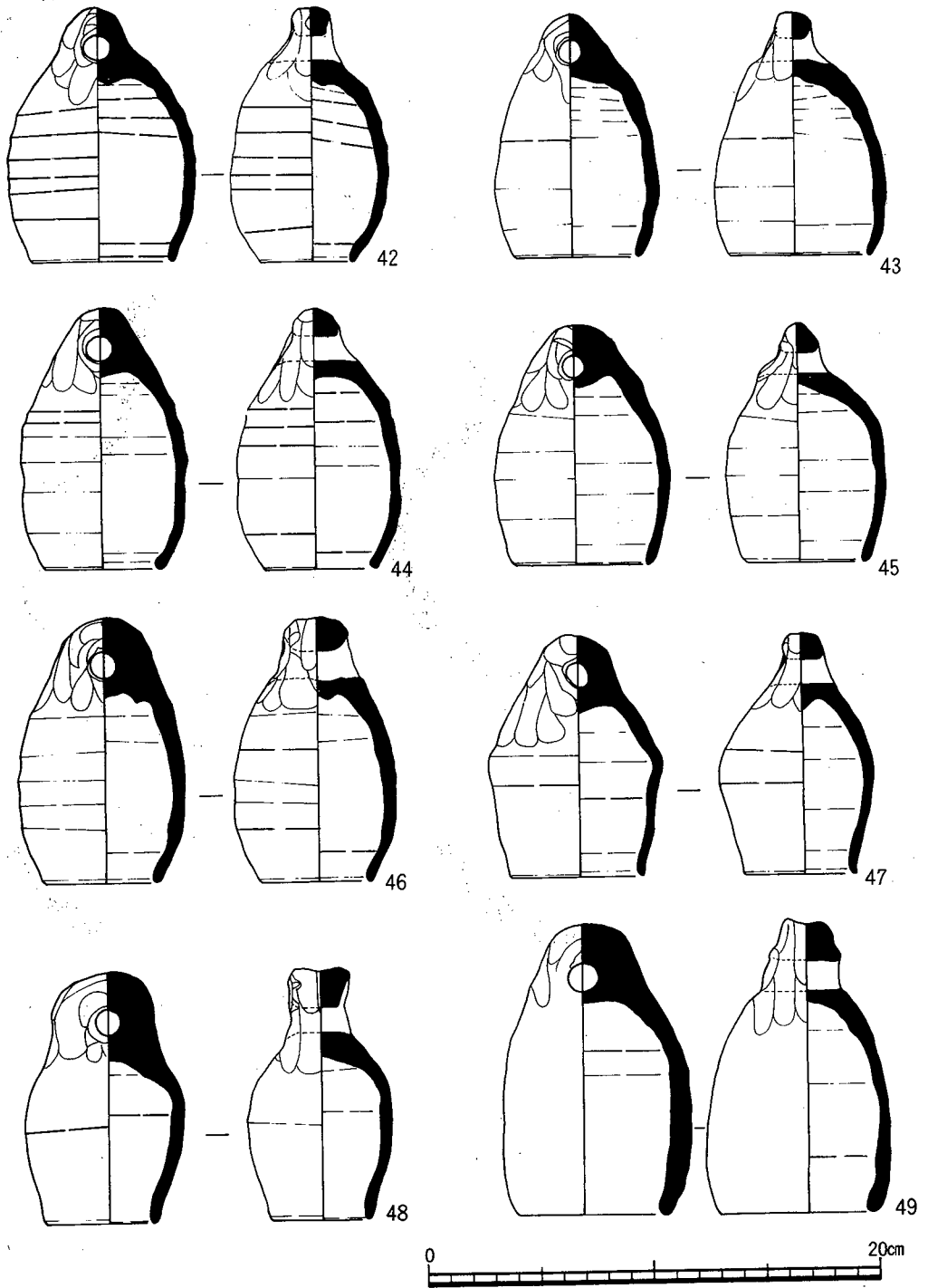


图9. 溝1 (SD-1) 出土遺物

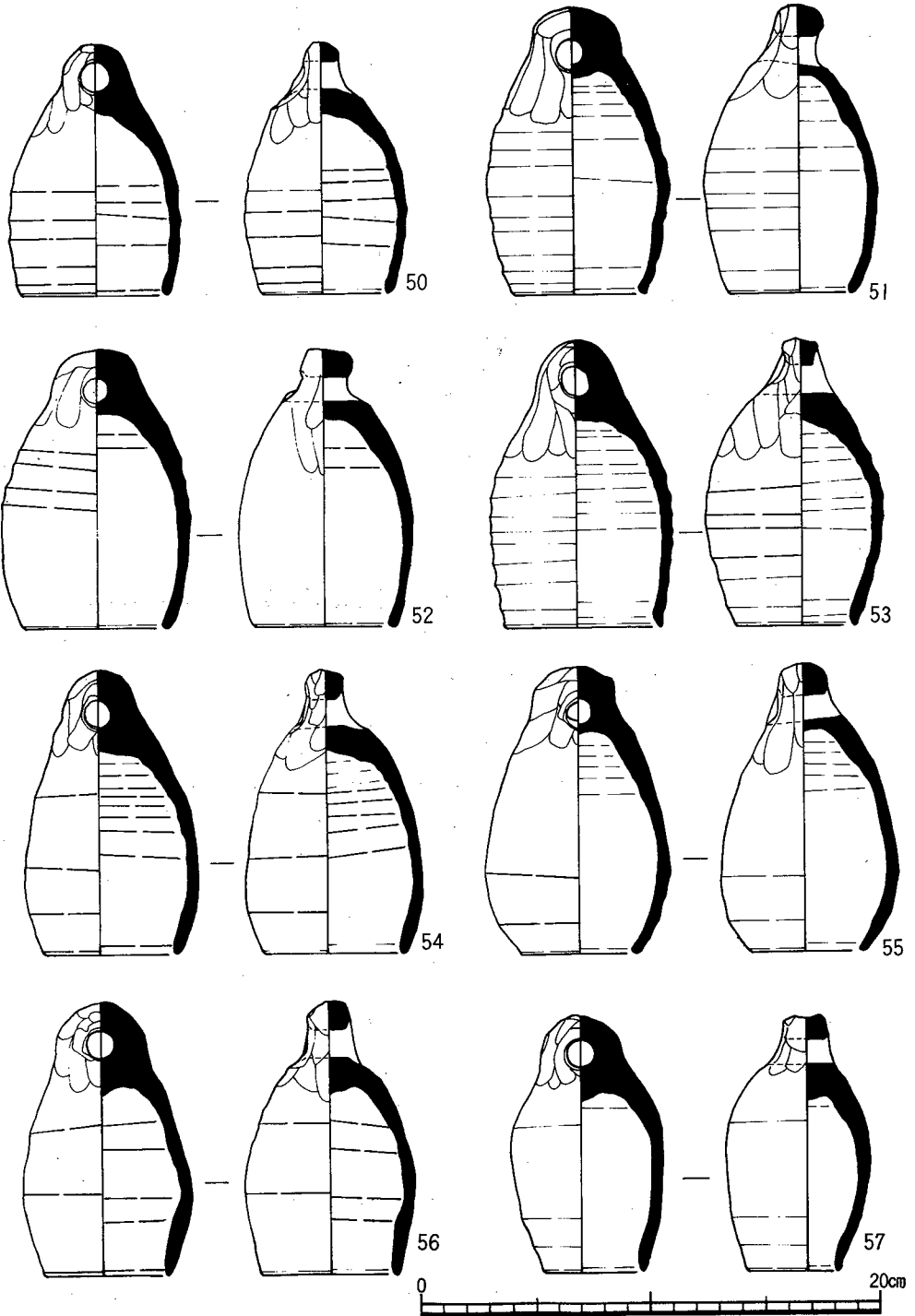


图10. 沟1 (SD-1) 出土遗物

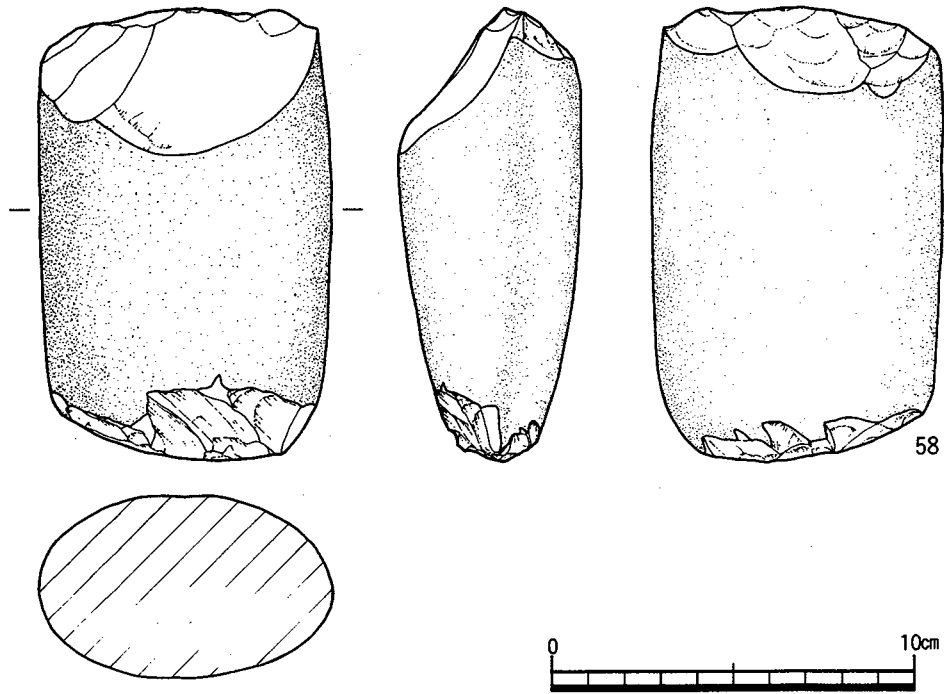


図11. 土壌101 (SK-101) 出土遺物

掘立柱建物

掘立柱建物跡はA区内において2ヶ所で検出しているが、調査区が幅4m程度という狭いトレンチであるため、検出し得た掘立柱建物3, 4 (SB-3, 4)の全体規模は不明である。

SB-3は竪穴式住居跡2 (SB-2)のすぐ西側で検出したもので、検出規模は2間(全長2.7m)×1間以上(1.7m)である。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し、径約70cmの掘り方内に約20cmの円形の柱部分を有する。

SB-4はSB-3の東側でほぼ平行して並ぶ一列のみの柱穴列である。規模は3間(全長4.4m)を一辺とする建物であるが、その他の部分は全て調査区外へ延びるため不明である。SB-4はSB-2との切り合い関係を有し、SB-2よりも新しい時期の建物であり、柱穴内からは正確な時期を判定するには至らないものの黒色土器の小破片が出土している。

SB-3およびSB-4については建物方向性などからほぼ同時期のものと考えられるが、正確な時期については前述したように出土遺物が希薄であり明確ではない。あえて時

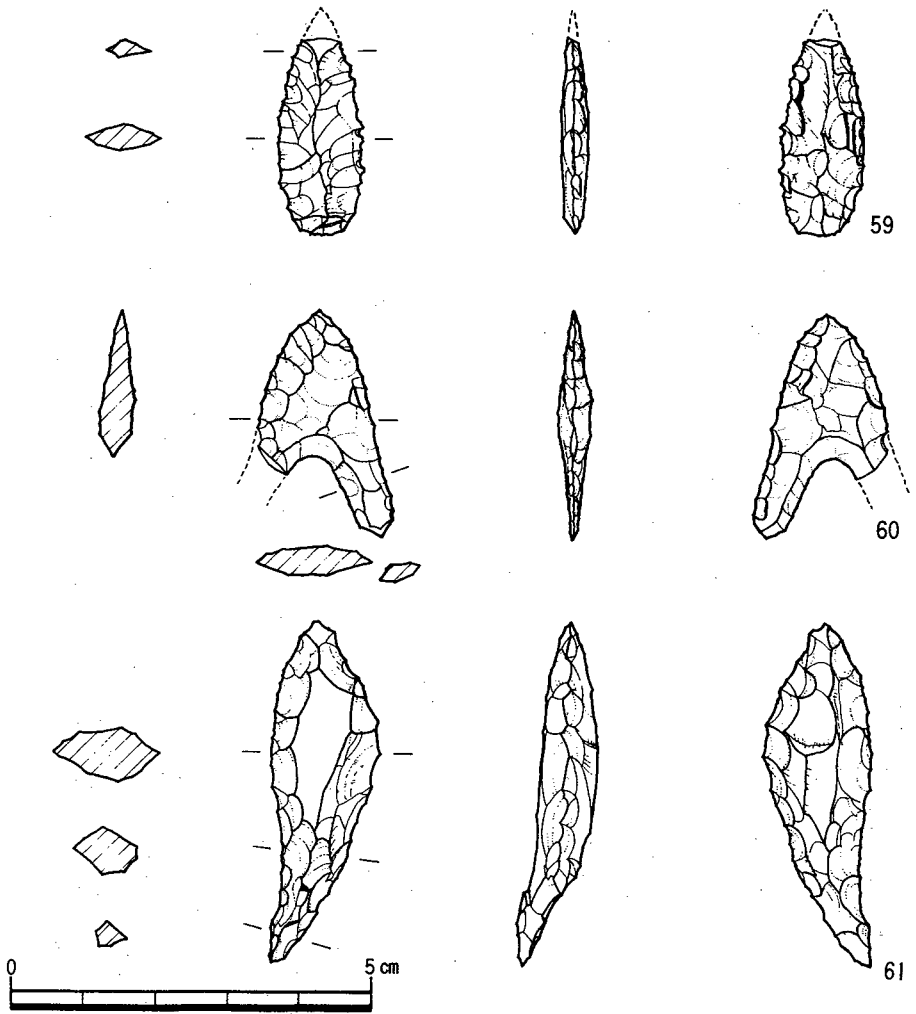


図12. 竪穴式住居跡102(SB-102) 出土遺物

代をあてはめるならばおおむね9世紀以降の建物かと思われる。

その他、柱穴状遺構や土壇状遺構等を各所で検出しているが、時期・性格等については不明確な遺構である。なお、今回の調査で出土した遺物の詳細については後述の遺物観察表にとりまとめて報告することにする。

Ⅱ 沢遺跡の調査

1. 位置と環境

発掘調査を実施したのは、南海本線二色ノ浜駅より旧国道26号線を二色ノ浜公園（海岸部）方面に向かって約200m程下がった西側に広がる水田耕作地の一角で、現在の海岸部からは約600m程度内陸部に入った地点である。海拔は約9mを測り得る。

周辺は現在のところ他地域に比べればまだまだ水田耕作地が広がり、遺跡の残存状況も良好な地域であると考えられる。しかしながら、これも近年の全市的な現象として見られる小規模な宅地開発等により、徐々にではあるが脅かされつつある地域でもある。

この地域の歴史的環境としては、周知の遺跡である中世城跡の沢城跡、二色ノ浜駅周辺に広がる奈良時代以降の集落跡である澁池遺跡や平安時代の寺院跡と考えられる明楽寺跡等々、各時代の遺跡が密集している。

今回の調査は、これら遺跡地のマークからは少しはずれた地点ではあったが、ここを宅

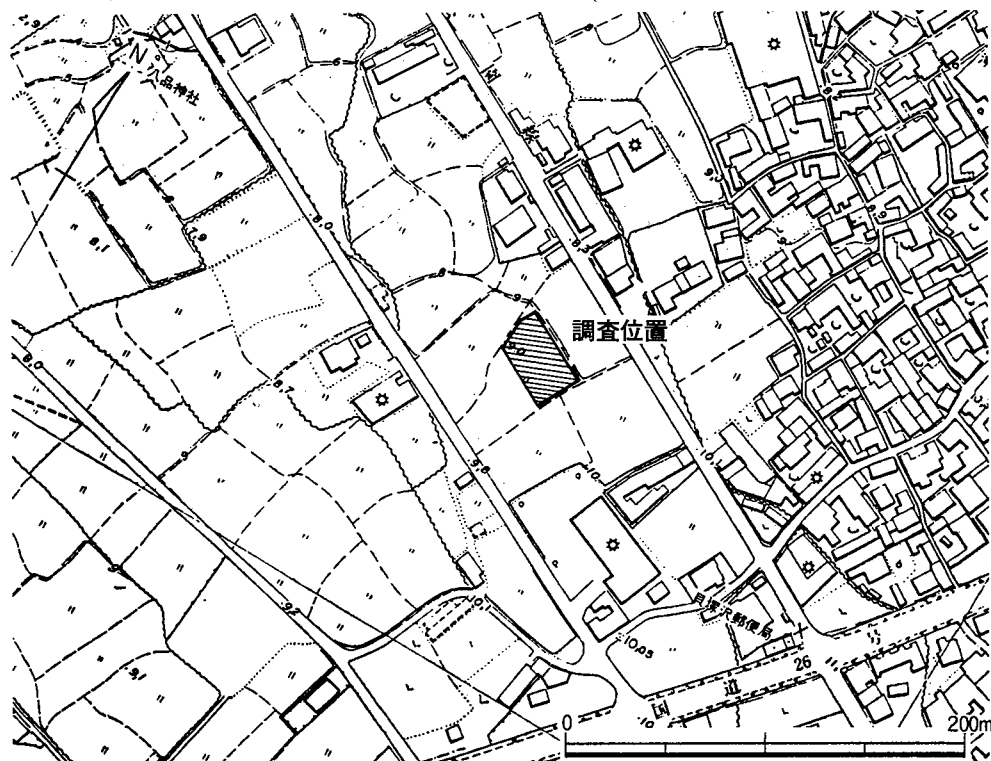


図13. 沢遺跡調査位置図

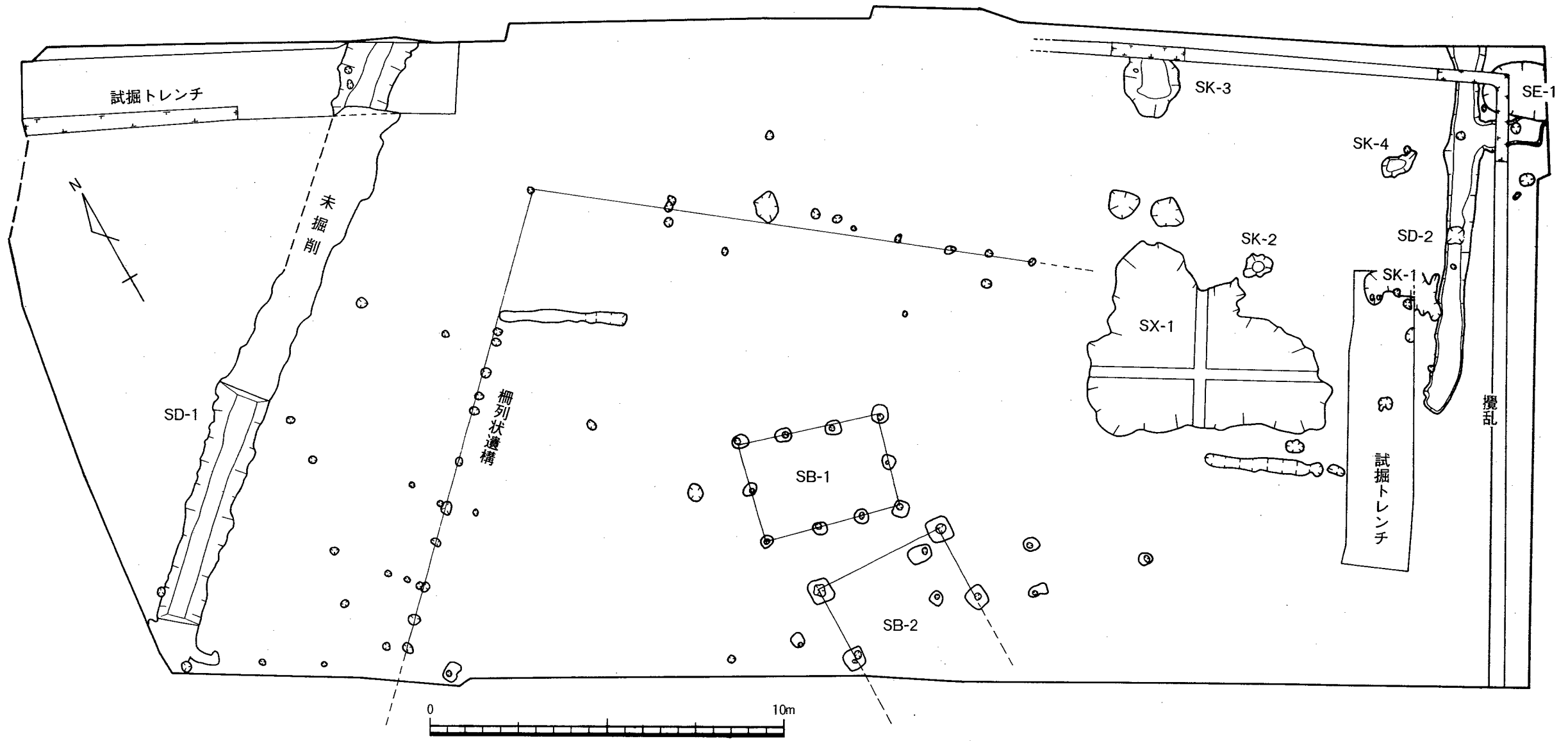


図14. 遺構平面図

地化するとのことで、遺跡の有無確認を実施したところ弥生時代と思われる溝状遺構および奈良時代頃かと思われる性格不明の土壌を検出したため、遺跡地としての取り扱いを行う一方約700㎡程の発掘調査を実施していった。

2 遺構と遺物

調査区の基本土層としては、その大部分が耕作土直下で黄色地山面となり、遺構の検出は全てこの地山面で行った。なお、調査区の北西部では若干の遺物包含土層が残存し、西端に向かうほど厚く、最深部では耕作土直下より約0.3mを測り得た。

遺物包含土層からの出土遺物としては、土師器片、瓦器片、青磁片が少量出土しており、時期的には中世のものである。ただ、これらの出土遺物は全て細片で図示するまでには至らなかった。

検出遺構の種類としては、溝状遺構2条（SD-1, 2）、掘立柱建物2棟（SB-1, 2）、土壇状遺構4基（SK-1～4）、井戸1基（SE-1）、性格不明の落ち込み状遺構1ヶ所（SX-1）および柵列状遺構等を検出している。

以下、検出遺構の種類別に報告することにする。

溝状遺構

今回の調査で報告し得る溝状遺構は、2条検出している。

溝1（SD-1）は、調査区の西方部で検出した溝で、水流方向は南西から北東方向に向かって走っている。規模としては幅1.2～1.5m、遺構検出面よりの深さは平均0.5～0.6mを測り、溝内土層断面形はやや緩やかなV字形を呈している。溝内埋土は粘質土層の上層と砂質土の下層とに大きく分けられるが、出土遺物から判断して時期的な差異はほとんどないものと思われる。出土遺物は全て弥生式第I様式のやや新しい時期のものと思われる。器種としては壺、甕、鉢等の破片（遺物番号62～76）のほか石鏃（82）、石包丁片（83、84）の石器類も出土している。これらは溝内上方および下方からほぼむらなく出土しているが、下層の一角に固まって出土した部分があり、一種人為的に使用不能土器を投棄したような出土状況であった。これらの土器群の出土状況および周辺の地形から見て当時の集落がこの溝の東方あるいは南東方向に存在するのではないかと思われるが、今回の調査ではこの時期に伴うような住居跡等は検出できなかった。

溝2（SD-2）は、調査区の東端で検出した一直線状に延びる溝である。規模は幅約

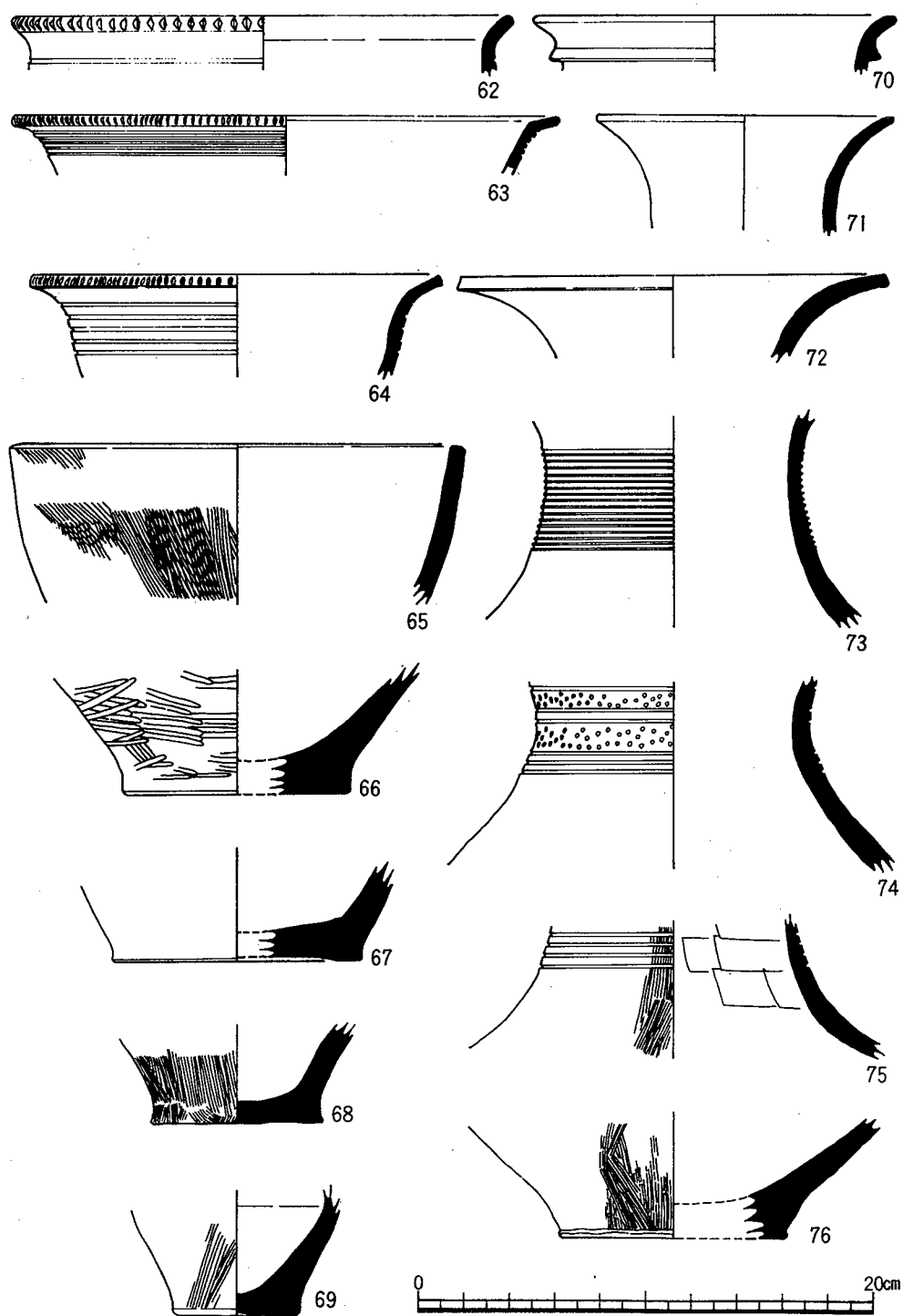


图15. 溝1 (SD-1) 出土遺物

0.8m、遺構検出面よりの深さ0.1~0.3m程度を測り、水流方向は南南西より北北東に向かっている。また、この溝に直交する形で同規模程度の溝が1条東方に派生しているが溝内埋土にそれぞれ変化はなく、また切り合い関係も有しないことから同一時期のものと思われる。検出全長は約10m程度であるが、溝自体が浅いこともあり南側部分では中世等の時期に削平され消滅したと思われる。出土遺物は少なく弥生式土器の混入はあるものの須恵器高台付坏(79)や鉢(80)を若干検出しており、奈良時代頃のものと思われる。これは後述する掘立柱建物とほぼ同様の時期かと思われる。

掘立柱建物

掘立柱建物1(SB-1)は、調査区の中央部のやや南寄りで検出した桁行3間(約 $1.3 \times 1.3 \times 1.3m = 約3.9m$)、梁行2間(約 $1.3 \times 1.3m = 約2.6m$)の建物である。柱穴の掘り方は円形あるいは隅丸方形で直径約0.4m程度を測り、柱あたりは0.1~0.15m程である。

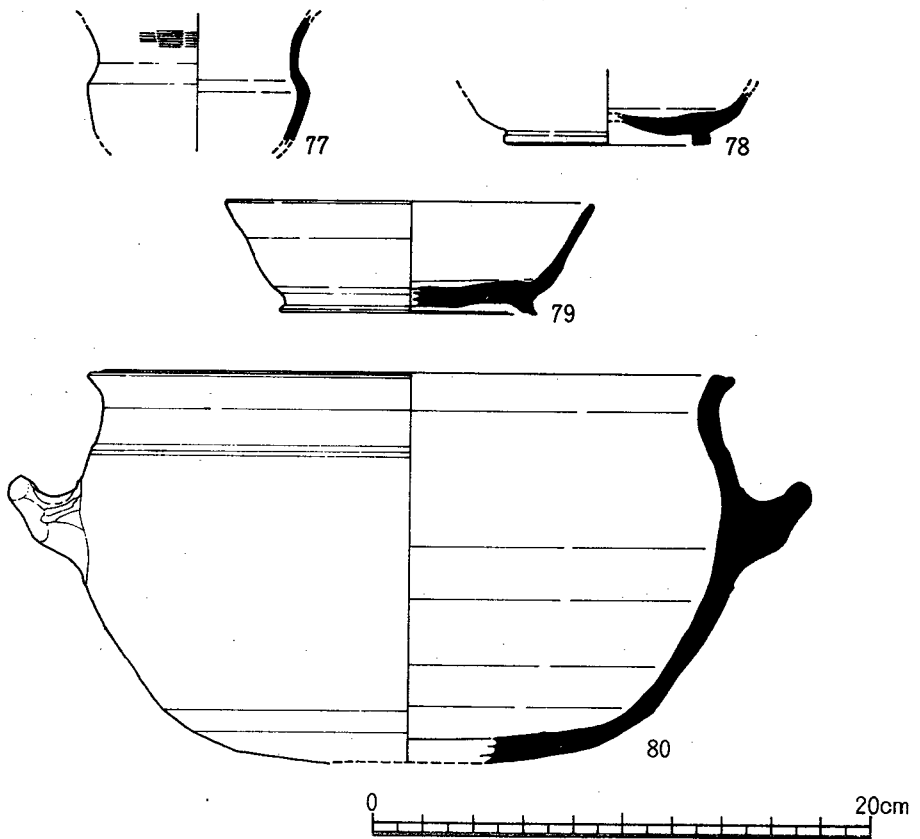


図16. 掘立柱建物1(SB-1), 溝2(SD-2)出土遺物

出土遺物としては柱穴内の掘り方部分から土師器小型壺片（77）、須恵器高台付坏片（78）が出土しており、奈良時代頃のものと思われる。

掘立柱建物2（SB-2）は、SB-1の南側で若干方向を異にして検出した建物である。建物規模としては、検出し得ている部分で約3.8×2.1mの1間四方であるが、調査区域外へさらに延びている可能性もあり建物としてはさらに大きくなるものと思われる。柱穴の掘り方は方形を呈し、一辺約0.6m前後で柱あたりは直径約0.25m程度をはかり、SB-1よりは規模的に大型のものと思われる。建物の時期としては、柱穴内からの出土遺物が全くなく不明といわざるを得ない。ただ、建物方向からSB-1と同時期ではないと思われるものの柱穴内埋土の状況から見てさほど大差を有しないものと思われる。

土壌状遺構

土壌1（SK-1）は、調査区の東側で試掘調査時に検出した不定形土壌である。規模としては最大幅約2m、遺構検出面よりの深さは0.1m程度である。出土遺物としては埋土内より瓦器破片のほか土師器の細片が若干出土しているものの図示に耐え得るものは1点もなかった。

土壌2（SK-2）は、SK-1の西側約3mの地点で検出したものである。規模としては直径約0.7m、深さ約0.3mを呈する不整形な楕円形で、埋土内からは瓦片が出土した。

SK-1、2はそれぞれの出土遺物から中世頃のものと思われるが、あまりにも細片であるため明確に時期を限定し得るものではない。

土壌3（SK-3）は、SK-2の北側約5mに位置し、一部攪乱暗渠により破壊を受けているが、規模としては直径約1.6m、深さ約0.15mのほぼ円形を呈するものである。遺構内埋土からは弥生式土器の細片が少量出土したが、いずれも小破片であるため図示するには至らなかった。

土壌4（SK-4）は、SK-1の北側約3mで、SD-2に沿って検出した遺構である。規模としては長径約1.1m、短径約0.5m、深さ約0.1m程の楕円形を呈するものである。出土遺物としてはSK-3と同様数点の弥生式土器の細片が出土したのみである。なお、SK-3、4の時期については、出土遺物が弥生式土器片のみの出土であるとはいえ弥生時代の土壌とするにはやや問題があるように思われる。

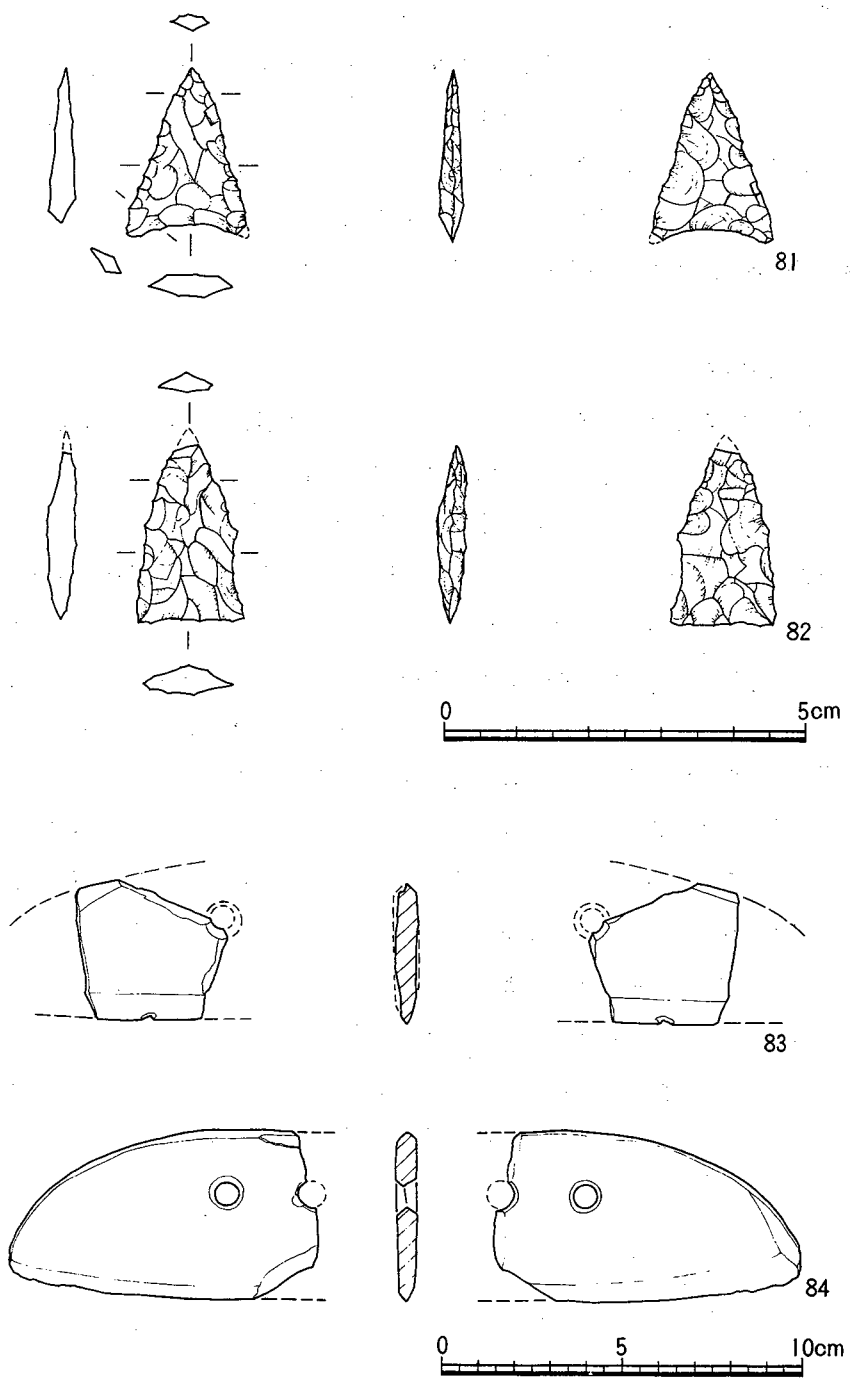


圖17. 溝1・2 (SD-1・2) 出土遺物

井戸

井戸1 (SE-1) は、調査区の北東隅で検出した遺構である。調査の都合上遺構内埋土の除去までは行わず、遺構の検出のみにとどめている。規模としては直径約2mで、素掘りの井戸と思われる。遺構上面清掃中に須恵器片、瓦器片等も出土しているが、若干の染付陶磁器片が出土しており、少なくとも時期的には近世頃のものと思われる。出土遺物は全て小破片であるため図示するには至っていない。

その他の遺構

性格不明の落ち込み状遺構としてSX-1を1ヶ所検出している。規模としては不定形なもので最大径約7m、深さは約0.1m程度を測り得た。出土遺物としては土師器片、須恵器片、瓦の細片等の他に瓦器の小破片が若干出土している。時期としては明確に限定できるものではないが、瓦器片の出土からSK-1, 2と同様中世頃のものかと思われる。

さらに、今回の調査では柵列状遺構を合わせて検出している。規模としては直径0.15~0.3m、深さ0.1~0.25mを測り、円形の掘り方を呈する柱穴列で、柱穴の間隔は不均一である。列方向はSD-1の南東5~6mのところ、SD-1にやや平行して走るものと南東から北西方向に走り、前者に鈍角状に交わる柱列がある。時期としては単一時期の鍵手に屈曲する柵列状遺構であろうが、時期を明確にし得るほどの出土遺物はなく不明といわざるを得ないものである。ただ、不明確ではあるがSD-1とやや平行気味に走ることや柱穴内よりただ1片ではあるが弥生式土器と確認し得る遺物が出土していることからSD-1と同時期の可能性をも考慮しておきたい。

各遺構内からの出土遺物について、今回図示報告しているのはSD-1およびSD-2 SB-1出土の遺物のみであり、その他の遺物については図示に耐え得るものではなかった。各遺物の詳細については遺物観察表にとりまとめているので参照されたい。

出土遺物観察表

堀 遺 跡

種別	図面番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器高坏	図4-1	口径：17.5 残存高：5.6	口縁部は内湾しながら外上方に延び、端部はやや外反する。坏部の底部と口縁部の境にわずかな稜が見られる。	口縁部は内外面共横ナデ、他は摩滅のため調整不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面淡褐色 内面明赤茶色 口縁部 $\frac{1}{5}$ 残存 反転復元 SB-101
土師器高坏脚部	図4-2	脚端部径：12.4 残存高：5.9	柱部は外下方に開き、裾部は短く、柱部から更に外下方に延びる。	裾部は内外面共横ナデ。柱部は内面がへら削り、外面は刷毛目調整の後、不定方向のナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗茶褐色 脚端部 $\frac{1}{5}$ 残存 反転復元 SB-101
土師器高坏脚部	図4-3	残存高：6.4	柱部は外下方に開き、裾部は更に外下方に延びる。	柱部内面はへら削り、外面上位は不定方向のナデ、下位は縦方向の刷毛目調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：濃茶赤色 SB-101
砥石	図4-4	最大長：31.0 最大幅：8.5	断面八角形を呈して、各面はほぼ平らであるが、中には使用摩滅による凹みを有する面もある。		色調：乳白色 研磨条痕が数ヶ所に見られる。 SB-101
土師器高坏	図5-5	口径：14.6 脚端部径：11.7 器高：13.6	口縁部は坏部の底部から外上方に外反しながら延びており、外面の口縁部と底部の境にわずかな稜をもつ。脚部の柱部は胴張りがなく細い。柱部から外下方に裾部が開き、裾部端面は平らである。	外面：坏部は全体的に刷毛目調整で、脚部は柱部が刷毛目調整の後、不定方向のナデ、裾部が刷毛目調整の後横ナデ。 内面：坏部は口縁部が刷毛目調整の後横ナデ、底部は不定方向のナデ。脚部は柱部が斜方向のへら削り、裾部が刷毛目調整。	胎土：やや粗 焼成：ほぼ良好 色調：淡褐色 脚端部 $\frac{1}{5}$ 残存 一部反転復元 SB-102
土師器高坏	図5-6	口径：14.7 残存高：5.0	口縁部は直線的に外上方に延び、端部はわずかに外反する。内面底部はほぼ平らで、外面の口縁部と底部の境に稜をもつ。	外面は刷毛目調整の後、横ナデ、内面はへら磨き調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：赤褐色 坏部のみ残存 口縁部 $\frac{1}{5}$ 残存 一部反転復元 SB-102
土師器高坏脚部	図5-7	残存高：5.0 孔径：1.1	柱部は比較的細く、裾部に向かって外下方に開く。柱部下位に2ヶ所対面に穿孔されている。	外面は不定方向のナデ、内面は上位がへら削り、下位が不定方向のナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：茶褐色 SB-102
土師器小型壺	図5-8	口径：7.8 残存高：4.8	口縁部は外上方に延びた後、内傾しながら上方に延びており、内傾部分の外面は凹面を成している。体部は内湾しながら外下方に延びる。	口縁部は内外面共、横ナデ、体部内面はへら削り。外面は不定方向のナデ調整。	胎土：やや粗 焼成：やや不良 色調：淡褐色 口縁部 $\frac{1}{5}$ 残存 反転復元 SB-102

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器小型壺	図5-9	口径：7.7 器高：8.5	体部はやや肩の張った円形を呈し、口縁部は外上方に延びる。	外面：体部は刷毛目調整、口縁部は横ナデ調整。 内面：体部はヘラ削り、口縁部は横ナデ。体部と口縁部の接合部分に指押え痕を有する。	胎土：密 焼成：良好 色調：濃褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SB-102
土師器小型壺	図5-10	口径：9.0 器高：8.8	体部は中心に最大径をもつ偏球形を呈し、口縁部は外上方にやや内弯気味に延びる。	外面：口縁部は横ナデ、体部は刷毛目調整の後、不定方向のナデ。 内面：口縁部は横ナデ、体部上位は不定方向のナデ、下位はヘラ削り。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：外面—濃褐色 内面—黒茶色 SB-102
土師器甗	図5-11	口径：14.5 残存高：8.7	体部は頸部からやや内弯気味に外下方に延び、口縁部は外上方に延びている。口縁端部はやや外反し、端面は丸い。	内外面共口縁部は横ナデ、体部内面はヘラ削り、外面はタタキ目調整である。	胎土：やや粗 焼成：やや不良 色調：濃茶赤色
土師器壺	図5-12	口径：15.0 残存高：16.3	口縁部は外上方に直線的に延び、端部はやや厚く、内側に稜状の突起を有する。体部は内弯しながら外下方に延びる。	内外面共口縁部は横ナデ、体部内面はヘラ削り、外面は粗雑な刷毛目調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：淡褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SB-102
土師器高坏	図6-13	口径：18.3 脚端部径：9.8 器高：13.4	口縁部はなめらかに内弯しながら外上方に延び、端部はやや外反する。口縁部と坏部の底部との境にわずかな稜をもつ。脚部は柱部の胴張りがなく、柱部から外下方にほぼ直線的に裾部が延びる。	外面：柱部のみ不定方向のナデ、他は横ナデ調整。 内面：坏部全面は不定方向のナデ、柱部はヘラ削り、裾部は横ナデ調整である。	胎土：密 焼成：良好 色調：明褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 、脚端部 $\frac{1}{2}$ 残存、一部反転復元 SB-2
土師器高坏	図6-14	口径：16.3 残存高：12.0	坏部の底部と口縁部の境に稜がみられ、口縁部は外弯気味に外上方に延びる。脚部の柱部はやや胴張りがあり、柱部の半ばより外反しながら裾部に向かって開く。	外面：口縁部は刷毛目調整後横ナデ、柱部は刷毛目調整後不定方向のナデ。他は不定方向のナデ調整。 内面：口縁部は刷毛目調整後横ナデ、坏部底面は不定方向のナデ、柱部はヘラ削り調整である。	胎土：密 焼成：ほぼ良好 色調：淡褐色 脚部の裾部のみ欠損 SB-2
土師器甗	図6-15	口径：13.0 残存高：7.4	体部に胴張りがあり、口縁部は外上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。	体部成形後、口縁部貼り付け。 外面：口縁部は刷毛目調整後横ナデ。体部は緻密な刷毛目調整。 内面：口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ調整。体部と口縁部の貼り付け部分に指押えが顕著。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SB-2
土師器高坏	図6-16	口径：19.3 残存高：6.2	口縁部は外上方に延び、端部はやや外反する。口縁部と坏部の底部との境に稜をもつ。	外面：口縁部は刷毛目調整後横ナデ、他は横ナデ。 内面：坏部底面は不定方向のナデ、口縁部は刷毛目調整後、横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡褐色 坏部のみ残存 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SB-2
土師器甗	図6-17	口径：18.0 残存高：6.8	体部に胴張りがあり、口縁部は外上方に延び、端部はやや外反する。	内外面共、摩滅のため調整不明。	胎土：やや粗 焼成：やや不良 色調：淡褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SB-2

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器小型壺	図6-18	口径：8.7 残存高：7.5	体部はほぼ円形で、口縁が外上方に延びる。	外面：口縁部は縦方向の刷毛目調整後横ナデ、体部は緻密な刷毛目調整。 内面：口縁部は横ナデ、体部は不定方向のナデ調整。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：濃茶赤色 口縁部 $\frac{2}{3}$ 残存 反転復元 SB-2
土師器壺	図6-19	口径：10.0 残存高：8.5	体部は頸部から外下方に丸みを帯びながら延び、口縁部はほぼ直立気味に外上方へ延びる。	外面：頸部は横ナデ、他は刷毛目調整。 内面：口縁部は横ナデ、体部はへら削り調整。 また、口縁部と体部の接合部分に指押え痕を有する。	胎土：密 焼成：良好 色調：濃茶赤色 口縁部 $\frac{2}{3}$ 残存 一部反転復元 SB-2
土師器壺	図6-20	口径：11.0 残存高：5.4	口縁部はほぼ直立気味に外上方へ延び、端部はやや外反する。	口縁部は内外面共、刷毛目調整の後、横ナデ調整。	胎土：密 焼成：ほぼ良好 色調：淡褐色 口縁部のみ残存 SB-2
土師器高坏	図7-21	口径：18.0 残存高：6.8	坏部は底部がほぼ平らで口縁はやや外反する。	内外面共、口縁部は横ナデ調整。坏部外面口縁部から底部にかけて、横方向の刷毛目で底部は縦方向の刷毛目が施されている。 内面は不定方向のナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：淡茶褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SB-1
土師器高坏	図7-22	口径：20.4 脚端部径：13.1 器高：13.1	坏部は底部がほぼ平らで口縁部はやや外反する。 坏部外面の口縁部と底部の境にわずかな稜をもつ。	外面：口縁部は横ナデ、坏部の底部は不定方向のナデ、稜付近は刷毛目調整後ナデ調整。脚部は剝離のため調整不明。 内面：坏部は口縁部が横ナデ、底部は不定方向のナデ調整。脚部は柱部がへら削り、裾部が横ナデ調整。	胎土：やや粗 焼成：やや不良 色調：赤褐色 口縁部残存 脚部端部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SB-1
土師器坏	図7-23	口径：13.8 器高：5.2	半球形を呈しており、口縁部は鋭く外反する。	外面：口縁端部は横ナデ、他は刷毛目調整後、不定方向のナデ調整。 内面：口縁端部は横ナデ、底部に指押え痕を有する。 他は緻密な刷毛目調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡茶褐色 SB-1
土師器小型壺	図7-24	頸部径：7.2 残存高：5.2	体部は球形で丸底。口縁部は欠損しているが、体部から外上方に延びるものと思われる。	内外面共摩滅しており調整不明。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：外面—淡褐色 内面—淡褐色 SB-1
土師器高坏脚部	図7-25	残存高：7.4	柱部はほとんど胴張りがなく、ほぼ直立で裾部は柱部からほぼ横方向に屈折している。	外面：柱部は不定方向のナデ、裾部は横ナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：外面—淡茶褐色 内面—暗赤褐色 SB-1
須飯蛸壺形土器器	図7-26	口径：4.45 器高：11.0 孔径：1.15	体部と釣手部の接合部分にくびれがほとんどなく、最大径部分が体部の中心よりやや下である。口縁部はやや内傾する。 釣手部はほぼ円形でやや薄手である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付後、指ナデ、穿孔後オリコミ手法。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：淡紫灰色 外面側面に一条の線刻あり 口縁部 $\frac{2}{3}$ 残存 反転復元 SX-5

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須臾 蛸壺形 土器	図7-27	口径：4.2 器高：11.4 孔径：1.0	体部と釣手部の接合部分にわずかなくびれがあり、最大径部分が体部のほぼ中心にある。口縁端部はやや内傾気味である。釣手部はやや角ばった楕円形である。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後、指ナデ、穿孔後オリコミ手法。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—薄茶灰色 内面—濃灰色 口縁部 $\frac{2}{3}$ 残存、反転復元 SX-6
須臾 器 坏 蓋	図7-28	口径：11.7 残存高：1.9	全体的に平べったく、口縁内面に短いかえりを有する。天井部に宝珠様つまみを有すると思われるが、欠損している。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共回転ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SK-2
土 師 器 盟	図7-29	口径：19.7 残存高：2.8	底部はほぼ平らで、口縁部は内湾気味に上外方へ延び、端部は丸い。	内外面共、口縁部は横ナデ、底部は不定方向のナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡茶褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SK-2
土 師 器 土 錘	図7-30	残存長：6.3 孔径：0.7	円筒状を呈するが、穿孔部分の面は平らである。	手づくね成形の後、ナデ調整。	胎土：やや粗 焼成：やや良好 色調：淡褐色 $\frac{1}{2}$ 残存 SK-2
須臾 器 坏 蓋	図8-31	口径：11.5 器高：4.3	天井部から口縁部にかけて丸みを帯び、天井部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共回転横ナデ、外面天井部は粗雑なナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 SO-1
須臾 器 坏 蓋	図8-32	口径：11.0 残存高：4.0	天井部から口縁部にかけて丸みを帯び、天井部と口縁部の境にくびれによるわずかな稜がみられる。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：明灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SD-1
須臾 器 坏 蓋	図8-33	口径：10.8 器高：3.2	全体的に丸みを帯びているが平べったく、天井部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共、回転横ナデ、外面天井部は粗雑なナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：濃灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須臾 器 坏 蓋	図8-34	口径：10.2 器高：2.7	器高が低く扁平である。立ち上がり部分はやや内傾気味で短く受端部とほとんど同じ高さである。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共、回転横ナデ調整。底部は粗雑なナデ調整。立ち上がり部分はオリコミ手法による。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 SD-1
須臾 器 坏 身	図8-35	口径：10.3 器高：3.4	全体的に扁平であるが、底部は丸みを帯びている。立ち上がり部分は、やや内傾気味で短く、受端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共、回転横ナデ調整。底部は粗雑なナデ調整。立ち上がり部分はオリコミ手法による。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 外面に自然釉付着 釉色—茶緑色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 坏身	図8-36	口径：10.7 残存高：2.3	立ち上がり部分が薄手でやや内傾し、受端部は鋭く直立する。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共、回転横ナデ調整。立ち上がり部分及び受端部はオリコミ手法による。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—濃灰色 内面—灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SD-1
須恵器 壺	図8-37	口径：12.4 残存高：15.6	体部は肩がやや張るが、ほぼ円形である。口縁部は体部から外上方に直線的に伸び、端面は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。外面底部は回転ヘラ削り後、不定方向のナデ、内面底部は不定方向のナデ調整。他は回転横ナデ調整。体部中央部に3~4cmの間隔で刺突文が施される。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SD-1
須恵器 高坏脚部	図8-38	脚端部径： 10.4 残存高：8.6	柱部は細く、柱部半ばより外反して開き、裾部は大きく開く。柱部の中央部に凹線が一条めぐる。端部はやや厚く、端面は凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須恵器 高坏	図8-39	口径：12.3 脚端部径： 8.6 器高：7.6	坏部の口縁部は体部から直立して立ち上がり、端面は丸い。坏底部は浅く、ほぼ平らである。脚部は下外方にやや外反気味に伸び、端部は内側に屈曲している。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏部外面の底部はヘラ削り、坏部内面の底部中央部は不定方向のナデ調整。他は回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
土師器 坏	図8-40	口径：16.8 器高：6.0	底部はほぼ平らで、口縁部は内弯しながら外上方に伸びる。端部はやや外反し、断面三角形を成す。	外面：口縁端部は横ナデ、底部は指押え痕を有する。口縁部から底部にかけて横方向の平行暗文が施される。 内面：口縁端部は横ナデ、口縁部から底部にかけて縦方向の平行暗文が施される。	胎土：密 焼成：ほぼ良好 色調：濃茶褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
土師器 坏	図8-41	口径：16.4 残存高：5.6	口縁部は内弯しながら外上方に伸び、端部はやや外反する。	外面：口縁端部は横ナデ、口縁部の一部に様方向の平行暗文が施される。口縁部から底部にかけてはヘラ削り調整。 内面：口縁端部は横ナデ、口縁部の一部に横方向の平行暗文、口縁部から底部にかけて縦方向の平行暗文が施される。	胎土：密 焼成：良好 色調：赤茶色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SD-1
須飯 蛸壺形土 器器	図9-42	口径：5.85 器高：10.8 孔径：1.2	体部と釣手部の接合部分にくびれがあり、最大径部分は体部のほぼ中心。釣手部は円形でやや薄手である。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—茶灰色 内面—灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸壺形土 器器	図9-43	口径：5.5 器高：12.3 孔径：1.2	体部と釣手部の接合部分にくびれがあり、最大径部分は体部のほぼ中心。釣手部は方形に近い楕円形でやや重厚である。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：灰白色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸壺形土 器器	図9-44	口径：6.1 器高：11.9 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にわずかにくびれがあり、最大径部分は体部のほぼ中心。釣手部は丸みを帯びた方形でやや重厚である。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：淡褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1

種別	図番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須飯 蛸 壺 形 土 器	図9-45	口径：5.8 器高：12.3 孔径：1.3	体部と釣手部の接合部分にくびれがあり、最大径部分は体部のほぼ中心。 釣手はほぼ円形。 口縁部端面がやや外反気味である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—灰色 内面—紫灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図9-46	口径：5.8 器高：12.2 孔径：1.2	体部と釣手部の接合部分にくびれがほとんどなく、最大径部分は体部の中心よりやや下。 釣手部はほぼ円形。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：淡基灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図9-47	口径：4.8 器高：12.3 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にくびれがあり、最大径部分は体部の中心よりやや下で口縁部が内傾する。 釣手部は丸みを帯びた方形で重厚である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：白灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図9-48	口径：5.6 器高：11.7 孔径：1.2	体部と釣手部の接合部分にわずかにくびれがあり、最大径部分は体部のほぼ中心で、口縁部にやや厚みがある。 釣手部はやや角ばった楕円形である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部に自然釉 釉色：茶緑色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図9-49	口径：4.1 器高：11.0 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にわずかにくびれがあり、最大径部分は体部の中心よりやや上で口縁部が少し外反する。 釣手部は楕円形で重厚である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 釣手部から体部に自然釉 釉色：暗茶緑色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存、一部反転復元SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-50	口径：5.05 器高：11.1 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にくびれがあり、最大径部分は体部のほぼ中心。 体部は胴張りし、口縁部がやや外反気味である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—淡灰色 内面—灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-51	口径：5.8 器高：10.6 孔径：1.0	体部と釣手部の接合部分にくびれがほとんどなく、最大径部分は体部の中心よりやや下。 釣手部は三角形に近い円形で口縁部がやや内傾している。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—濃灰色 内面—灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-52	口径：4.9 器高：11.4 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にくびれがなく、最大径部分は体部のほぼ中心。 釣手部は三角形に近い円形で重厚である。口縁部はやや内傾気味である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-53	口径：5.4 器高：10.5 孔径：1.0	体部と釣手部の接合部分にくびれがなく、最大径部分は体部のほぼ中心。 釣手部は楕円形でやや薄手である。また体部は少し胴張り気味である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。 体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：淡基灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 反転復元 SD-1

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-54	口径：4.8 器高：11.6 孔径：1.2	体部と釣手部の接合部分にくびれがほとんどなく、最大径部分が体部のほぼ中心。釣手部は楕円形で極めて重厚である。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。但し内面天井部未調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-55	口径：5.3 器高：10.6 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にくびれがほとんどなく、最大径部分は体部の中心よりやや上。体部中心から口縁部にかけてほぼ直線で口縁端部がやや外反する。釣手部は丸味を帯びた三角形で体部は少し胴張り気味である。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-56	口径：4.45 器高：11.0 孔径：1.1	体部と釣手部の接合部分にくびれがあり、最大径部分は体部の中心よりやや上。釣手部は方形に近い楕円形で重厚である。また体部が少し胴張り気味で、口縁部がやや外反する。	マキアゲ、ミズビキ成形。釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法。体部は内外面共、回転横ナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
須飯 蛸 壺 形 土 器	図10-57	口径：6.6 器高：12.9 孔径：1.4	体部と釣手部の接合部分にくびれがほとんどなく、最大径部分は体部の中心よりやや下。釣手部は隅丸方形で、重厚である。	内外面共、不定方向のナデ調整。釣手部貼り付け後、ユビナデ、穿孔後オリコミ手法であるが、穿孔部分の調整がやや粗雑である。	胎土：やや粗 焼成：やや不良 色調：茶褐色 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存 一部反転復元 SD-1
石 斧	図11-58	最大長：12.5 最大幅：8.1 最大厚：5.1	基部と刃部がほぼ同幅で、刃部が基部に比べて厚手である。形状は正方形に近い隅丸長方形で断面は楕円形である。	丁寧な研磨調整。	色調：暗褐色 SK-101
石 鏃	図12-59	残存長：2.65 最大幅：1.15 最大厚：0.35	幅狭で薄手である。先端部は扁平で丸みを帯びた菱形で基部は五角形状を呈している。側辺の一部にステップ状を呈する部分がある。	両面共、丁寧な剝離調整。	材質：サヌカイト 色調：黒灰色 平基無茎式 SB-102
石 鏃	図12-60	最大長：3.1 残存幅：1.85 最大厚：0.4	基辺は三角形に深く凹み、逆刺は先端が鋭く長い。形状は丸みを帯びた菱形である。先端部の側辺にステップ状を呈する部分がある。	両面共、丁寧な剝離調整。	材質：サヌカイト 色調：黒灰色 凹基無茎式 SB-102
石 鏃	図12-61	最大長：4.7 最大幅：1.5 最大厚：0.8	先端部は鋭い菱形で、基部は不整の杏仁形である。基部から先端部にかけてやや弯曲する。	両面共、丁寧な剝離調整。	材質：サヌカイト 色調：黒灰色 SB-102

沢 遺 跡

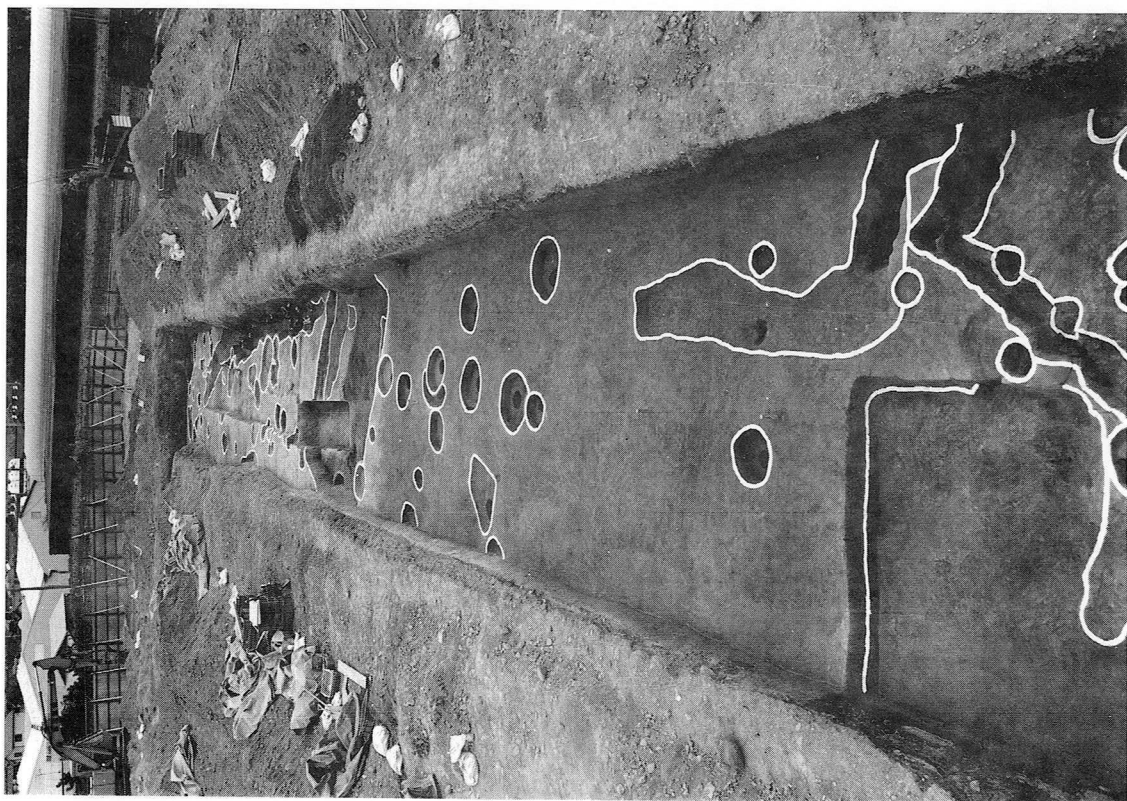
種別	図面番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
弥生式土器甕	図15—62	口径：21.4 残存高：2.5	口縁部及び頸部のみ残存。 口縁部は頸からやや外反気味に延び、端部は丸い。	内外面共、横ナデ。 口縁端部に3～5mmの間隔で幅広の刻み目を有し、外面頸部に沈線文が1条のみ残存。	胎土：密 焼成：やや良好 色調：暗茶褐色 口縁部残存僅少 反転復元、生駒西麓産 SD—1
弥生式土器甕	図15—63	口径：23.8 残存高：2.6	口縁部及び頸部のみ残存。 口縁部は体部から外上方に屈曲し、端部は丸い。	外面は横ナデ、内面は剝離のため調整不明。 口縁端部に2～4mmの間隔で幅狭の刻み目を有し、外面頸部に沈線文が5条巡る。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡赤褐色 反転復元 口縁部残存僅少 SD—1
弥生式土器甕	図15—64	口径：17.6 残存高：4.5	口縁部から体部上位にかけてのみ残存。 口縁部は頸部から外反しながら外上方に延び、端部は角ばる。	内外面共、横ナデ。 口縁端部に2～4mmの間隔で幅狭の刻み目を有し、外面頸部に沈線文が5条巡る。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—暗黄褐色 内面—黄褐色 反転復元、口縁部残存僅少 SD—1
弥生式土器鉢	図15—65	口径：18.8 残存高：6.9	口縁部から体部上位にかけてのみ残存。 口縁部は体部からやや内弯気味に延び、端部はほぼ直立。 口縁部はやや厚く端面は平担。	外面：縦又は斜方向の刷毛目で一部刷毛目を施した後、横ナデ。 内面：横ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—黄褐色 内面—灰褐色 反転復元 口縁部残存：1/5 SD—1
弥生式土器甕底部	図15—66	底端部径：10.0 残存高：5.1	底部及び体部下位のみ残存。 底部はほぼ平担で底端部は直角。体部は底部から外上方に直線的に延びる。	外面：不定方向の刷毛目を施した後、横方向のヘラ磨き。 内面：剝離のため調整不明。	胎土：やや粗 焼成：やや軟 色調：外面—黄褐色 内面—淡黄褐色 反転復元 底端部残存：1/5 SD—1
弥生式土器甕底部	図15—67	底端部径：10.0 残存高：4.1	底部及び体部下位のみ残存。 底部はほぼ平担で底面は凹状を呈する。 体部は底部から外上方に直線的に延びる。	外面：底面は不定方向のナデ。他は横ナデ。 内面：不定方向のナデ。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：外面—黄褐色 内面—淡黄褐色 反転復元 底端部残存：1/4 底面に靱痕を1ヶ所有する SD—1
弥生式土器甕底部	図15—68	底端部径：7.6 残存高：4.3	底部及び体部下位のみ残存。 底部はほぼ平担で底端部は鋭角的に突出する。 体部は底部から外上方に外反気味に延びる。	外面：底面は不定方向のナデ。他は縦又は斜方向の刷毛目。 内面：不定方向のナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡茶褐色 反転復元 底端部残存：1/2 外面に黒斑を有する。 SD—1
弥生式土器壺底部	図15—69	底端部径：5.6 残存高：5.5 残存幅：9.1	底部から体部中位にかけてのみ残存。 底部は内面がU字状を呈し、底面はほぼ平担で中央部がわずかに凹む。体部は底部から外上方に直線的に延び、中位で大きく内弯する。	外面：底面は不定方向のナデ。他は一部に斜方向の刷毛目を確認できるが摩擦のため不明瞭。 内面：不定方向のナデ。	胎土：やや粗 焼成：やや軟 色調：淡褐色 外面に黒斑を有する。 SD—1
弥生式土器壺	図15—70	口径：15.6 残存高：2.4	口縁部及び頸部のみ残存。 口縁部は頸部から外反しながら延び端部は丸い。	内外面共、横ナデ。 外面頸部に貼り付け突帯が1条巡る。	胎土：密 焼成：やや軟 色調：茶褐色 反転復元 口縁部残存僅少 SD—1

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器壺	図15-71	口径：12.8 残存高：5.0	口縁部及び頸部上位のみ残存。 頸部は筒状で、口縁部は頸部から外上方に大きく外反し、端部は丸い。	内外面共、摩滅のため調整不明。	胎土：やや粗 焼成：やや軟 色調：淡黄褐色 反転復元 口縁部残存： $\frac{1}{3}$ SD-1
弥生式土器壺	図15-72	口径：18.6 残存高：3.6	口縁部及び頸部上位のみ残存。 口縁部は頸部から外上方に大きく外反し、端部は角ばる。	内外面共、横ナデ。	胎土：密 焼成：ほぼ良好 色調：外面—黄褐色 内面—暗黄褐色 反転復元 口縁部残存： $\frac{1}{3}$ SD-1
弥生式土器壺	図15-73	残存高：9.2	頸部のみ残存。 鼓状を呈し、口縁部及び体部に向って外反する。	内外面共、横ナデ。 外面頸部中位に沈線文が16条巡る。	胎土：やや粗 焼成：やや軟 色調：黄褐色 反転復元 頸部残存： $\frac{1}{2}$ SD-1
弥生式土器壺	図15-74	残存高：8.2	頸部及び体部上位のみ残存。 頸部は鼓状を呈し、体部は頸部から外上方に直線的に延びる。	外面：頸部は横ナデ、体部は不定方向のナデ。 内面：剝離のため調整不明。 外面頸部に刺突文及び沈線文を施し、沈線文は6条のみ残存。	胎土：やや粗 焼成：やや軟 色調：外面—暗黄褐色 内面—黄褐色 反転復元 頸部残存僅少 SD-1
弥生式土器壺	図15-75	残存高：6.0	頸部下位及び体部上位のみ残存。 体部は頸部から外上方に外反しながら延びる。	外面：一部に縦又は斜方向の刷毛目を確認できるが摩滅のため不明瞭。 内面：頸部は横方向のヘラ削り、体部は横ナデ。 外面頸部に沈線文が4条のみ残存。	胎土：やや粗 焼成：やや軟 色調：外面—淡黄褐色 内面—黄褐色 反転復元 頸部残存： $\frac{1}{3}$ SD-1
弥生式土器壺底部	図15-76	底端部径：10.0 残存高：5.2	底部及び体部下位のみ残存。 底部はほぼ平担で、体部は底部から外上方に直線的に延びる。	外面：縦又は斜方向の刷毛目。 内面：不定方向のナデ。	胎土：密 焼成：やや良好 色調：外面—赤褐色 内面—褐色 反転復元 底端部残存： $\frac{1}{3}$ SD-1
土師器小型壺	図16-77	残存高：4.9	口縁部下位から体部中位にかけてのみ残存。 体部は扁球形で、口縁部は体部から外上方に外反しながら延びる。	外面：口縁部の一部のみ刷毛目で他は横ナデ。 内面：横ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：外面—茶褐色 内面—淡褐色 反転復元 頸部残存： $\frac{1}{3}$ SB-1
須恵器坏	図16-78	高台径：8.4 残存高：2.1	底部及び体部下位のみ残存。 底部はやや丸みを帯び、底面は凹状を呈す。底端部にやや重厚な直立の高台を付し、高台端面は平担。体部は底部から外上方に内弯しながら延びる。	体部成形後、高台部貼り付け。 内外面共、回転横ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 反転復元 底端部残存： $\frac{1}{4}$ SB-1
須恵器坏	図16-79	口径：14.4 器高：4.4 高台径：10.2	体部は底部から外上方にやや内弯気味に延び、口縁部はやや外反し薄手。 底部はほぼ平担で、底端部に八の字型の高台を付し、高台端面は内傾する凹面を成す。	体部成形後、高台部貼り付け。 内外面共、回転横ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 反転復元 口縁部残存： $\frac{1}{3}$ SD-2

種別	図面番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須 惠 器 鉢	図16-80	口径：24.2 残存高：15.5	体部は扁平な半球形を呈し、底部はほぼ平坦。口縁部は頸部から外上方に短く延び、端部は厚手で、端面はやや外傾の凹面を成す。外面体部中位に把手を付し、体部から外上方に内弯しながら延び端部は丸い。	把手部貼り付け後、ユビナデ。 外面：底部は回転ヘラ削りで他は回転横ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 反転復元 口縁部残存： $\frac{1}{4}$ SD-2
石 鏃	図17-81	最大長：2.35 残存幅：1.7 最大厚：0.35	薄手で扁平な菱形を呈す。逆刺はやや鋭さを欠き、基辺の凹みは浅い。側辺にステップ状を呈する部分を有する。	両面共、丁寧な剝離調整。	材質：サヌカイト 色調：黒灰色 凹基無茎式 SD-2
石 鏃	図17-82	残存長：2.5 最大幅：1.5 最大厚：0.45	先端部は扁平な菱形、基部は台形を呈す。側辺は凹凸が激しく、ステップ状を呈する部分を有する。	両面共、丁寧な剝離調整。	材質：サヌカイト 色調：黒灰色 平基無茎式 SD-1
石 包 丁	図17-83	残存長：4.2 残存幅：3.9 残存厚：0.6	刃部は直線的で、背部は刃部に対して斜傾するが、全体的な形状については不明。残存部の斜上部に紐孔の穿孔面を有する。	両面共、研磨調整。 刃部に横方向の研磨痕を有する。	材質：緑泥片岩 色調：黄褐色 両刃式 SD-1
石 包 丁	図17-84	残存長：8.5 最大幅：4.7 最大厚：0.6 孔径：0.5 孔間距離： 1.4	半月形を呈し、体部上位に2ヶ所の紐孔を有す。刃部は直線的で端部がやや弯曲する。背部は弯曲し、端部に近い程弯曲が急となる。	両面共、研磨調整。 刃部は横方向、体部は縦方向の研磨痕を有する。	材質：緑泥片岩 色調：灰緑色 両刃式 紐孔の穿孔部分に紐擦れ痕、背部に背潰れ痕を有する。 SD-1

圖

版



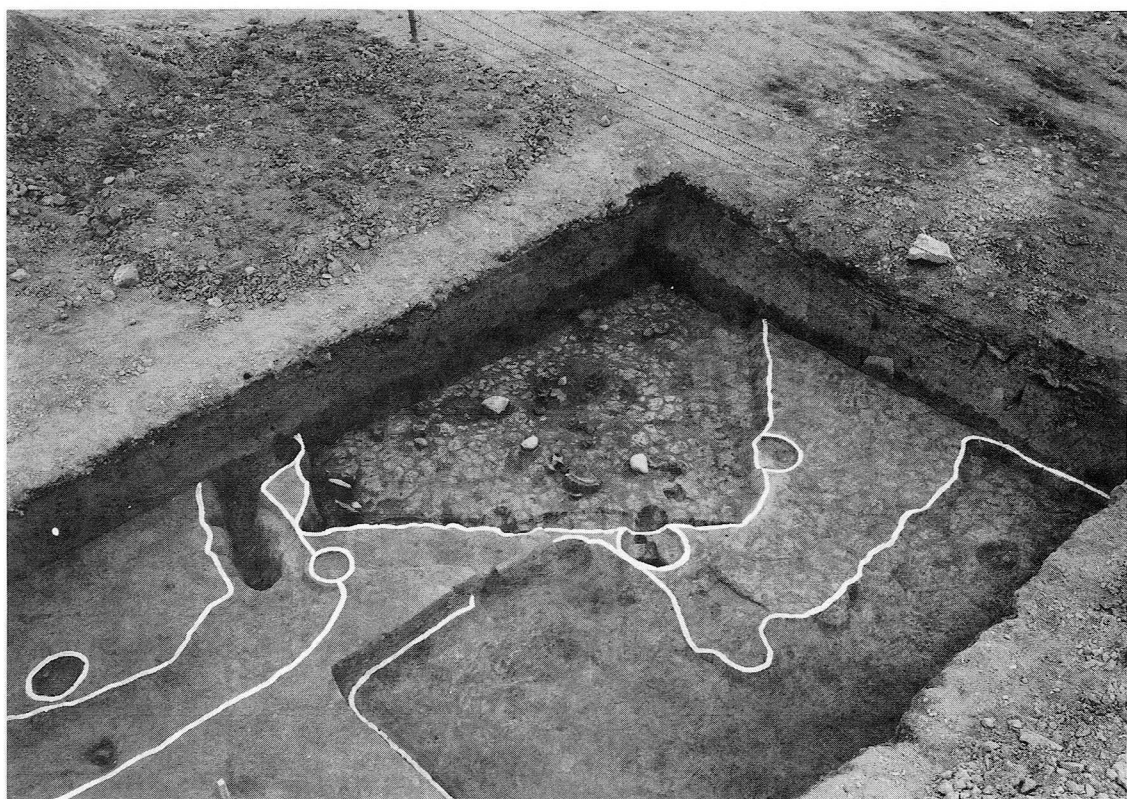
1. A区調査区全景

北西より



2. 同 上

南東より



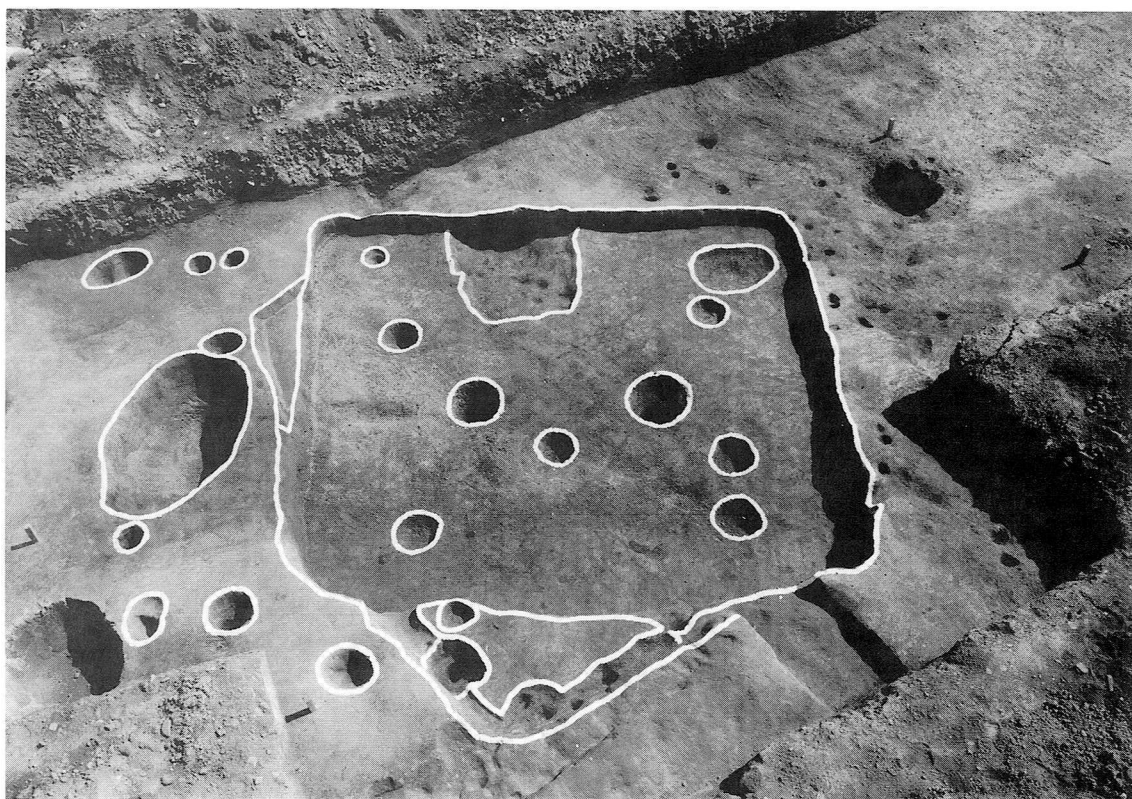
1. A区調査区、竪穴式住居跡1 (SB-1)

東より



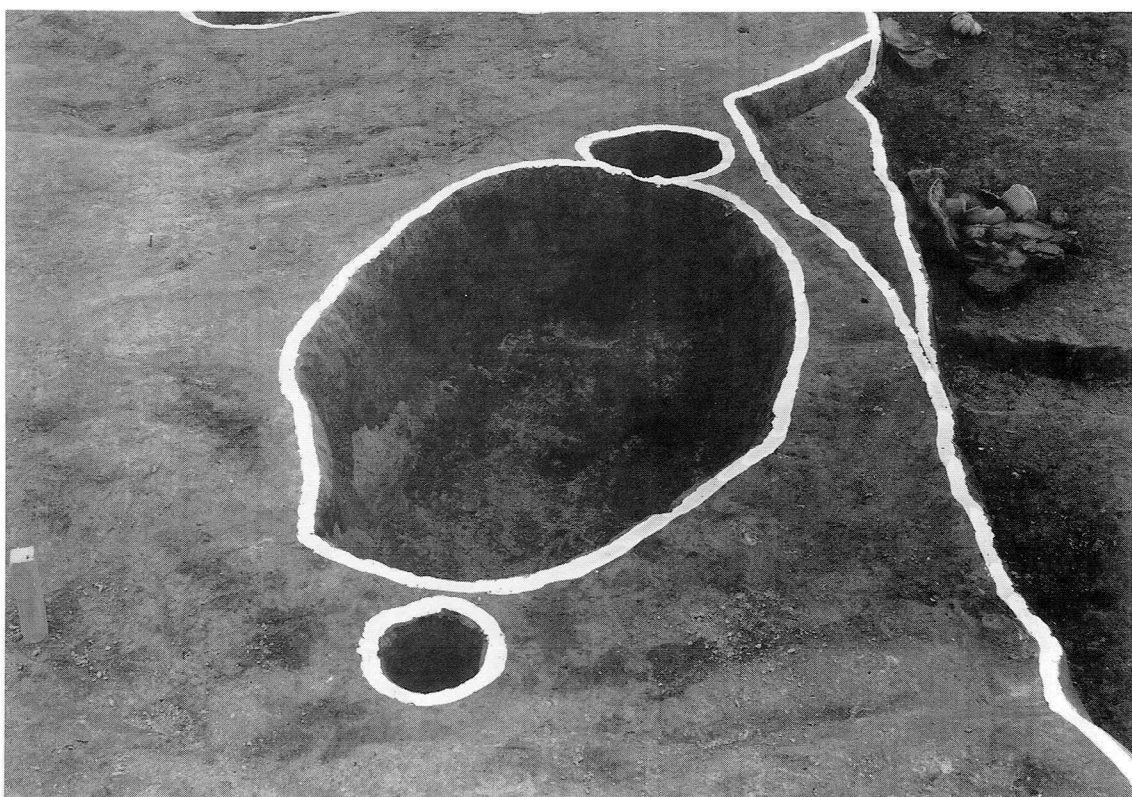
2. A区調査区、竪穴式住居跡2 (SB-2)

北東より



1. B区調査区、竪穴式住居跡101・102 (SB-101・102)

西より



2. B区調査区、土壇101 (SK-101)

西より



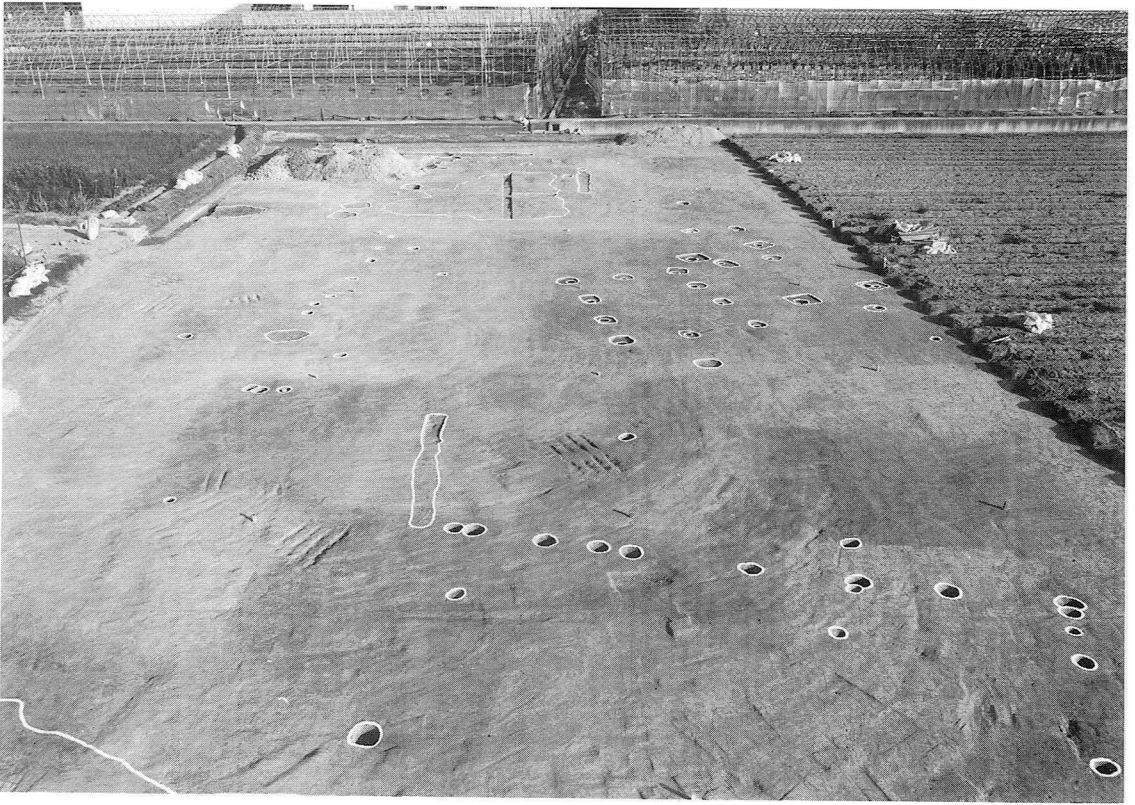
1. A区調査区、溝1(SD-1)遺物出土状況

北西より



2. 同 上

南東より



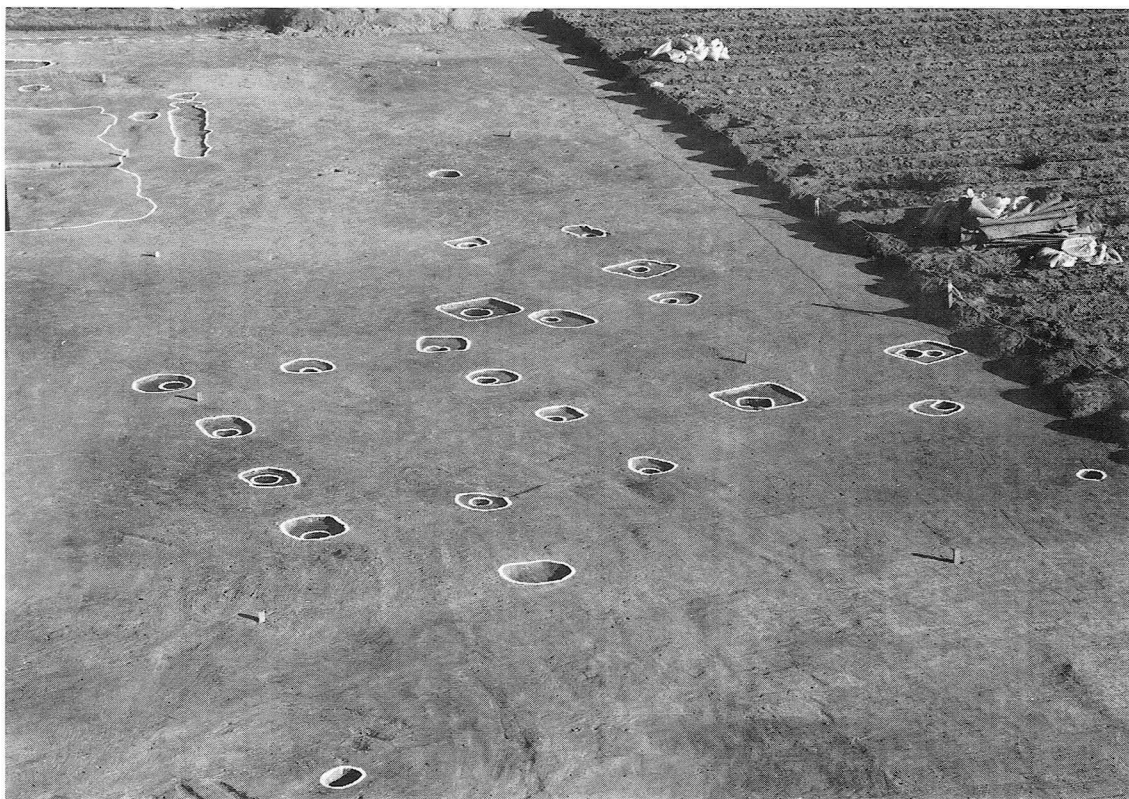
1. 調査区全景

西より



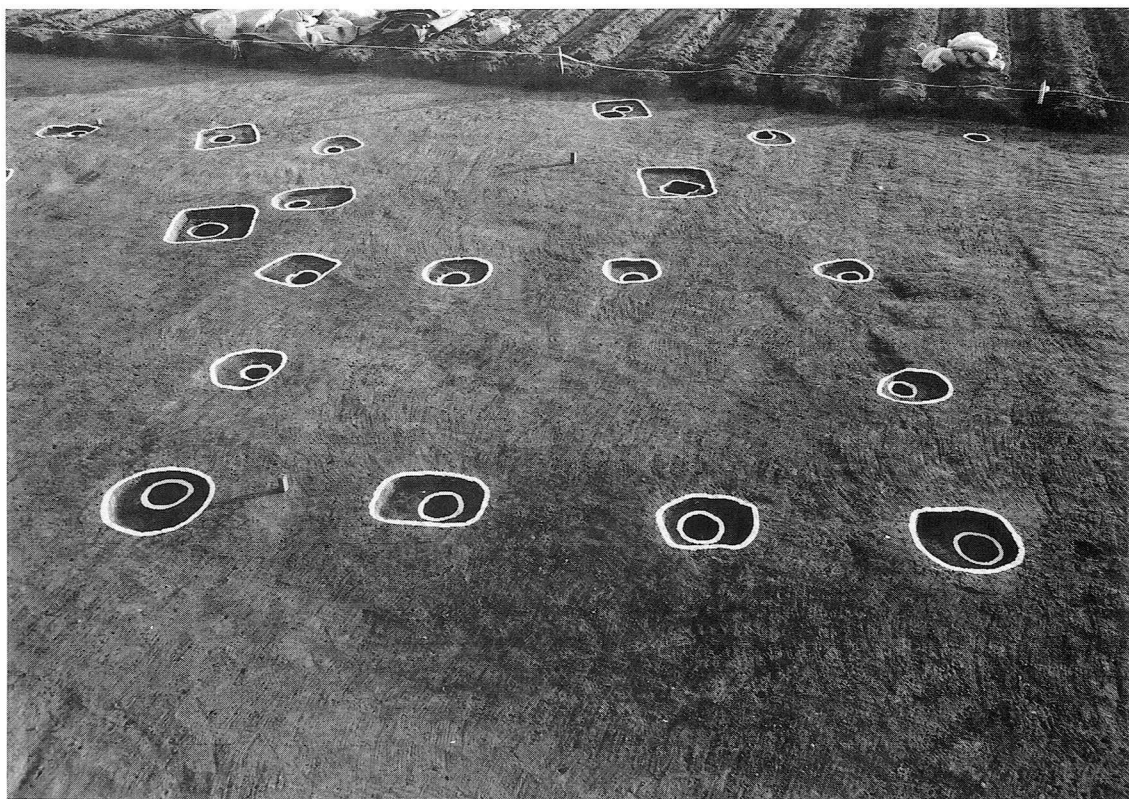
2. 溝2(SD-2) 付近全景

南より



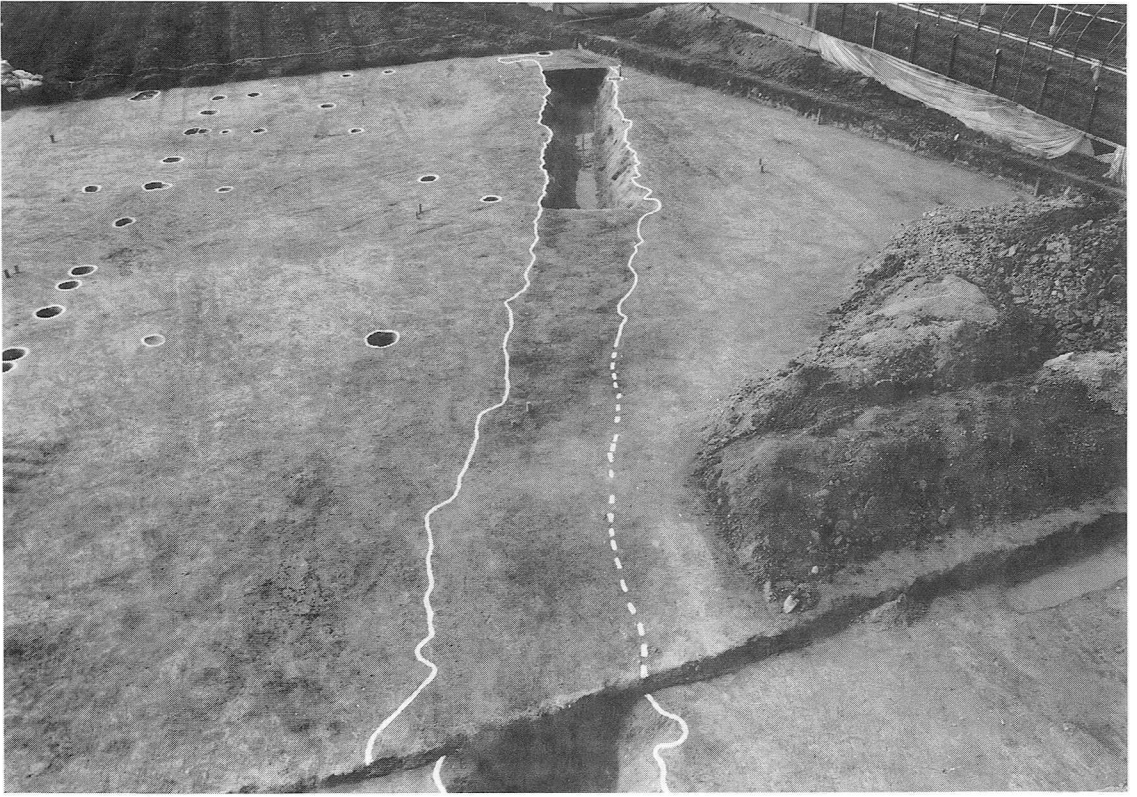
1. 掘立柱建物1・2(SB-1・2)

北西より



2. 同 上

北より



1. 溝1 (SD-1)

北東より



2. 同 上、土層断面

南西より